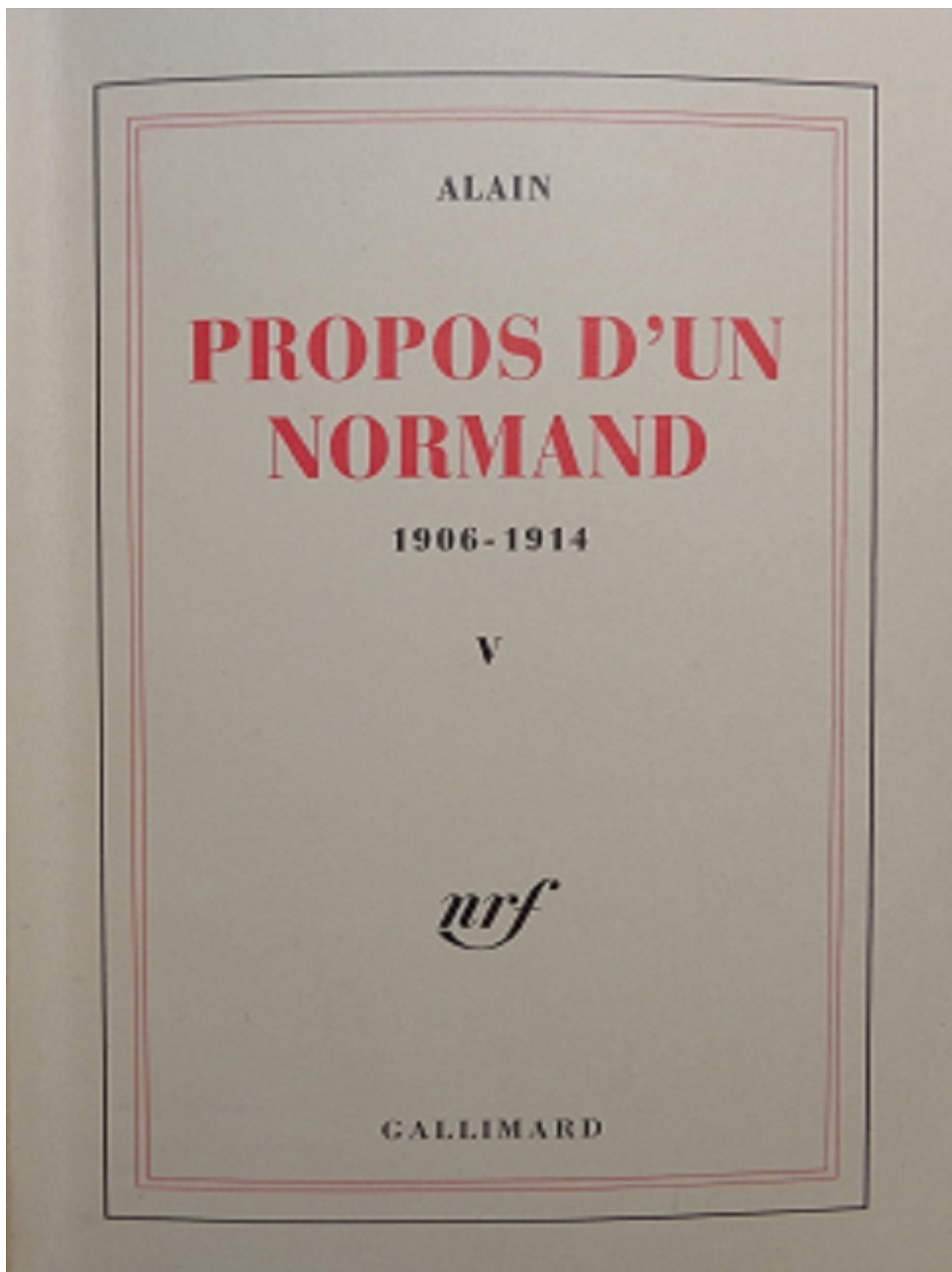




アラゴン

一ノルマンディー
人のプロポV
【2014年7月号】

翻訳：高村昌憲



アラン 『一ノルマンディー人のプロポ V』の表紙

見知らぬ人から私に書いてよこしました、「平和や戦争についてのプロポは、ふわふわ飛んでいる紙でしかないから、本にして下さい」。或る時は別の人からも同じ様な忠告を頂戴しましたが、もっと厳しい批判でした。その人は言っていました、「これは何だろう。何時も気分次第の気儘な書き方で、即興ではないのか。あなたは読者に考えを整理させるのが多すぎる。但し、読者は決して整理しない。読んで忘れて仕舞う。一粒の麦を蒔くのではなくて、麦畑に蒔き散らすのだ。私は急進的理念を認めるが、更にそれを明確に表さなければならないのは、他のプロポと比べて判断するためである。私はもうあなたの短文を読まないが、本を出して下さい。私はそれを読むことにする」。

自然と本を出すしかない、と私は自覚します。私はそれこそ本を出すことを知ったのだと思います。序文で私は無秩序な意見や支離滅裂な理念を書きます。自分に都合の良い時間に、私の本をご覧になってみることです。その後で私は前に書いたものや今書いているものを要約します。たっぷりと十章程になります。その次にプロポの考えを発展させて行きます。しかしその代わりに各々の問題を、証明しているように見える論理の移行と共に、軍隊のように秩序立てて行きます。繰り返しや明らかな矛盾は特に避けて、それは批評家たちに喜ばれます。私が何かの結論を下した後では、全てを読み通し、創り直したいと思います。というのも最初のものを取り消す程にもっと力強く、もっと明白なことを他に発見しないなら、一冊の本を読み直すには十分に吟味していなければならないように思えるからです。しかし、私はもっと先に進みます。私は発行者の話も同じだと思います。私は褒美に二、三人の批評家に頁を捲られますが、直ぐに忘れられます。本は読まれません。読むのは他人任せで、人は意見を求めます。

人はポスターを読むように記事を読みます。一方を読まないとしても、他方を読みます。一つの決まり文句を覚えます。そのことを少しの時間考えます。抽象したり引きづったりすることをその儘にして置きます。読者は情熱を抱きますが、移り気です。閃きますが、突然に怠惰になるに決まっています。しかし、私は雲雀のハンターです。雲雀を誘き寄せる鏡を回転させます。私は銃に再び装填します。私は仕返しをします。戻り、改め、説明します。私は繰り返します。その注意力は鳥のようです。一度命中するには、沢山の矢を失わなければなりません。同様に、読むことも繰り返し読むことです。何年もの間、本の頁を捲るためには読書家の仕事も十分に巧みでなければなりません。ですから私は毎朝、私が気に入っている本の頁をあなたに開きます。そして私は、或る時はこちら、或る時はあちらに指を当てます。ぼんやりさせるか、苛々していても、私はどうでも良いのです。私は明日あなたを捕らえます。同様に私も退屈しているか否かです。人は毎日退屈していません。しかし、取分けこの不断の修正作用によって、私の本は私と同じ年齢になります。ところがもしも私がそれを終了あせて仕舞ったなら、本は単独で歳を取ります。それが本の流儀です。くる病の子供になり、皺だらけの子供になります。歳を取るという言葉から、それは私に二つの意味で注意するようになります。何故なら歳を取るのは、沢山変わ

ることであるからです。しかし人が良く言うように、一つのことからは決して全ては変わらないということでもあるからです。「そのことが分かれば上手に歳を取ったのです」。

(一九一三年八月十日)

一 政治に任せなさい (LAISSEZ LA POLITIQUE)

「政治に任せなさい。そこは全てがぼんやりしていて、はっきりせず、暗黒で、軽蔑すべきものです。私たちは陰謀を幾つも見ました。幾つもの驚きを本で読みました。忘却が、一人ならず多くの山師たちを覆っています。既に、一人ならず多くの破壊者たちが保守主義者を生んできました。それは大変に古い昔からの歴史です。それが歴史です。でも人間の奥深い歴史である馬の調教の歴史を語って下さい。その生活は作られ、教えられたものです。神々の創造者である本当の神を示して下さい。苦しみを乗り越えて、あなたが言うように見詰めましょう」。

そうではないのです。全ては時間がかかります。もしも物事が決して最良にならず、これ以上悪くもならず、権力は何時もそれを行行使する者たちを墮落させるのが本当だったならば、何故私は書いて来たのでしょうか。もしも労働と正義による歴史が本当の歴史であったならば、その他の歴史は消さねばなりません。そうでなければ、それは慰めのためでしかありません。私は諦めることが好きではありません。諦めは、梃子や車輪、滑車や舟、天秤や柱時計、数字や公平さを生んだりしません。馬の調教師は決して屈しませんでしたし、断念しませんでした。〈祖先〉を大切にしましょう。

危険な眠りとか動物的生活への回帰というものがあります。作ることをしないで、崇めます。創意工夫をしないで、慣れます。ドレフュス事件は政治的行為への目覚めであり、政治的創意への目覚めでした。でもその後で少し眠りすぎました。流された悪魔島にそのユダヤ人はもうおりません。しかし、それは一つの結果でしかありません。それらの原因を良く見て下さい。その結果はあなたを再び目覚めさせますが、凡そ十四年かかりました。しかしそれらの原因のみが、統治者たちに対しての支配への大きな反逆を引き起こしたのであり、決して記念すべきことではありません。不正が何時も行われることはあり得ます。何故なら間違いは何時もあり得るからです。しかし、その時は統治者の倫理観を激しく臆面もなく全てが晒される時です。国家的理由は何時も私たちのお金や生命を要求します。その上、精神的奴隷、自発的な盲目状態、現実や権力への崇拜を要求する時でもあります。行き過ぎでした。職人たちは全てを道具に任せていますし、職業には正義が委ねられています。ところで馬の調教師は決して諦めません。大仕事は、明日には立派な仕事になりますので、それが今日の仕事になり、毎日の仕事になるのを私は望みます。

人々は、戦争大臣の華々しい決まり文句に同意していました。彼は言っていたとのことですが、「私はドレフュス事件の前の状態に物事を戻すのである」。本当であつてもなくても、その言葉は至る所で危険な仕事を明らかにしていますが、信頼に足るのが確実そうな一人か二人の人間に権力を任せている状況があるのです。しかし、それが多分もっと危険なのです。彼らは人々を庇います。しかし注意して下さい。もし最も価値あるものが政府から大統領へ移ったならば、当然のこととして誰が政府内において二番目から一番目の地位に自然に移るのでしょうか。偏見や不正もなく世論という唯一の歴史のみによって表明することが出来る人間は、少しも確かでなく、怪しく、結局のところ私が話した統治者たちのこの致命的な〈倫理〉をぼかして理解し成功した

方法を最も正当化する気ではいるのです。そして私たちはそれ以外の全ての者であるので、ドレフ
ユス事件後の状況を正常に戻す必要があります、次から次に仕事にかかる方が良いのです。

(一九一三年一月三日)

二 贅沢 (LA LUXE)

贅沢な消費についての問題は十分に解明されていないことを、私は頂戴した手紙から理解しています。そして、お金が天下の回り物であり、浪費家たちが見境なくお金を使うことは、けちんぼが地面に埋めた財産よりも世の中のためになる、と書かれているものを良く読まないでしょうか。しかしながら、もしも化学者が鉛で本当の金を作るのを覚えて流通させたなら、誰もお金持ちになれないのは極めて明白です。その様な操作の結果、金の価値は下がります。もしも金と鉛が同じになれば、金の価値はすっかり下落して仕舞います。その結果は、金の価値の上下によって他の物が上昇したり下降したりする非常に敏感なバロメーターとか割引率になってくることです。直ぐに繊細なものになることを私は付け加えて置きます。空想ですがこの例について少し考えて下さい。あなたが化学者なら、製造した金で贅沢に沢山消費することが出来ます。しかしながら誰もお金持ちになりません。あらゆる物の値段が大変早く上がります。特に金で支払う人々が、もしも消費に喜びを見出して自分自身を忘れたなら、直ぐに言います、「私たちは思った程、全然得をしていない」。

しかし現実の世界に戻って、化学からは離れましょう。或る男が金庫に金を持っている時、そのことはあらゆる種類の物を生み出す権利を持っていることを意味しています。狂った百万長者が収穫した莫大な小麦を買い付けて、火事で消失します。それは飢餓を齎します。交換した金を食べるのでしょうか。いいえ、駄目です。でも小麦を買い占めないで、小麦を生産する農民を贅沢にも買い占めて儀仗にしてみたと仮定しましょう。結果は同じでしょうか。食い扶持が多くなって、生産力は小さくなります。莫大な消費に欠乏が生じます。

ここで反論するのは狂ったようなものです。この分配された金でロシアとかアメリカから小麦を取り寄せないのでしょうか。もっともなことです。それは当初に述べた観察者を騙す正常ではない流通です。しかし結局のところ、この莫大な消費は何時も消費すべき小麦が少ないのです。厳密には小麦よりも必要性が少ない石油や石炭や衣類があることも付け加えて置きましょう。常に小麦は多く生産されます。何故なら、常に食べなければならないからです。しかし人は、他人の必要とする生産物の消費を制限することが出来ます。その上で耐乏生活を送る人々は哀れであると言われます。羊毛の質の良いソックスを持っていない人々も、今は沢山あります。夫人帽子屋は羽付き帽子を作るのが少なくなり、その代わりに良いソックスを編みます。その結果、ソックスは高価でなくなり、貧しい人々も今までよりもっと質の良いソックスを履きます。あなたが言っていることは、ソックスやそれと同類の物は誰にとっても似た物になり、羽根付き帽子もそれ故に沢山作らねばならないということです。他にも解決があります。働くのを少なく出来れば、豊かさの中で最も大切な健康を確実なものに出来ることです。私は異常な者よりも、けちんぼの方が好きです。

(一九一三年一月四日)

三 社会的力 (FORCES SOCIALES)

社会的力は今では余りに弱いのです。私がそう理解するのは、機甲部隊、歩兵の行列、憲兵、警官のことではありません。それは反対でしかありません。その固有な力だけを借りて全国民を強制出来ないのは明白です。指導者は何時も肉体的に部下よりも弱いものです。いいえ、そうではありません。恐るべきことは、全国民が同意し熱狂し崇拝することです。宗教活動というものは、本来は革命的に見えます。活動の底には何時もそれがあります。美しいものや正しいものは何時も崇められます。卑劣で意地が悪いものは決して崇拝されません。そして崇拝する喜びが、崇拝を崇めます。以上は全てが皮肉なことです。

私は、マホメットが生まれた回教の聖地であるメッカの物語を読みましたが、そこはマホメット教徒たちが辛い旅をした後で、熱狂的な希望で最後には報われるのが分かります。何がそうさせるのでしょうか。天からの恩寵です。同時に、旅をして来た民衆が希望と共に崇めることの幸福によるのである、と理解して下さい。そして民衆は同じ報いを期待します。その宗教それ自体を考察するなら、全てが不可解ですが、それは子供じみた話です。全国民が心の裡に見付けるような道徳的教訓でしかありません。少なくともそれは異常な興奮のきっかけでしかありません。一人ひとりとは他人と同時に形づくられます。一人が多数であるように、多数によって高められ支えられて、一人ひとりとは燃えるような美しい真実の思想を形づくりします。その時は本当に詩を創っているのです。それを創造と言いたいのです。美しいコンサートや演説も、何かそれと似たようなものを体験させてくれます。全く真実らしくない粗雑で品の無い演劇に、涙を流さないのが確かなのは誰でしょうか。

人間は〈芝居〉や〈儀式〉で生活します。私生活は余りに退屈であり、飾り気のない死の予想や散文的なことや気苦労によって、直ぐにでも押し潰されます。しかし〈儀式〉は全てを神格化します。戦争は〈儀式〉です。もしもそうでないのなら、最早何も分かりません。人々は苦悩や死に向かって走ります。まさに彼らを止めなければなりません。そうです、彼らは全員一緒に行きます。団結が明らかにしています。一人ひとりとは信者であり、目的のためには小さいが、勇敢で、不死身です。戦争は〈詩〉です。〈叙事詩〉は一種の行進曲の歌です。叙事詩に良く退屈するのは、安楽椅子で読んでいるからです。しかし、その音とリズムが興奮した〈祖国〉や大群衆の足音を表すや否や、直ぐにでもメッカへ出発します。そして、その旅が明らかにします。戦争というものが明らかにしますし、彼らの死が証明します。スパルタの王妃ヘレネはトロイアにはいないと或る者たちは言います。他の者たちは年齢を計算して、彼女はもう美しくなかったことを証明するのを望んでいます。しかし、その戦士は彼女を取り戻すのを望みますし、他方では彼女を守りたいのです。彼女はトロイアの町にいて誰よりも美しいことを戦士は良く知っています。城壁の周りの多くの死骸がそのことを十分に証明しています。

(一九一三年一月七日)

四 職人と喜劇役者 (L'ARTISAN ET LE COMÉDIEN)

人間の性格は、お互いに多くの相違がある二種類の経験によって作られています。何故なら、事実の世界と人間の世界という二つの世界があるからです。農民は、自分の財産を多くの事物に依存させて働きます。人間に依存させることは極めて少ないです。反対に、役人や郡長やネクタイ屋や作家は、事物に依存することは極めて少なく、人間に依存することが多いです。政治家は、他の職業の人よりも多く人間に依存しています。運命が自分のものと比較されることが出来るのは、私は俳優しか知りません。そこからは色々と異なった成長があり、さもなければ示された思想があります。私は、本当の思想のことを話しているのであり、決して学校で教えられた言葉を言っているのではありません。

私は、鉄を打つ村の鍛冶屋の蹄鉄工を頭に入れて事物のことを考えました。彼の美しい顔付き、礼儀正しさ、追従、ついには祈る姿というものは、決してハンマーの一撃から生まれたものではありません。彼もそのことをほぼ知っています。かなり打ちますが、駆け引きはありません。その鉄は、彼が作ったようなものです。そして、その鉄は良いものでありさえすれば、高く評価されます。その運命は多くが彼自身、彼の眼、彼の腕に係っています。彼の才能は討議すべきものではありません。彼への嘘も、他の人への嘘も何ものでもありません。友情も憎しみも大して変わりありません。彼の仕事には、信者は殆どおりません。彼は他の人と違って同じではありません。彼には能力があります。事物の世界の法則に順応して従いますが、そこにあるのは合理性です。彼はハンマーを打つことを考えます。そして、良く考えます。私たちが科学と呼ぶものは、少なくとも全てが事物についての動きを前提としています。数学者といえども、この次元にあります。というのも数字や図形は、祈りを無視しているからです。

しかし人間たちには、祈って扱うしかありません。気に入って貰わなければなりません。お世辞も言わなければなりません。皆がやるように言わなければなりませんし、考えなければなりません。結局のところ人々は似てきます。俳優は観客の真似をします。弁護士は先ず訴訟人を真似ます。その次に彼を判断します。私は次の中国の諺を思い出します、「もしもあなたの判断がぐらついて不均衡なら、足を引きずることを覚えなさい」。雄弁家は、群衆の熱気と意見が一致します。それ故にプラトンは、修辞学とは一種の阿諛であり駆け引きのようなものである、と言いました。職業は個人の間を教育します。もしも私が時計を修理したかったなら、その成功は私にかかっています。全ての注意を時計に注ぎます。私の思想は全てが埒外です。というのも鉄や銅の部品には、情熱も悪意もないからです。それらの部品は自らの形状によって押し進みます。しかし、もしも私が銀行家とか企業家になりたかったなら、最早時計と同じ様な見方をしないでしょう。反対に機転を利かせたり、礼儀正しくしたり、本音を明かしたりしません。眼で沢山見ても、見た目には気に入らないのです。しかしその時、信仰は山を動かすと言えます。というのも信仰は感染するからです。それは人間を動かします。欲望を抱く儘に望まないことが重要です。即興が鉄則です。何故なら、言わねばならないことしか予想しないからです。しかし、その結果は何時も分かりません。屢々そこから生まれるのは怠惰な宿命論であり、衰れを催させる

観念であり、子供じみた理屈であり、そしてびっくりするような成功です。だが、平凡でも偉大でも職人は、人を管理し支配することを知りません。人事百般の出来事の自然な流れに従って、職人は焼き栗を引っ張り出すだけです。それを食べるのは、人間に対して演じる喜劇役者です。

(一九一三年一月十日)

五 上着を着た大臣 (LE MINISTRE EN VESTON)

何時も裁かれて、ついには支配するに違いない者たちによって導かれる国家権力のメカニズムを、一人ひとり理解するようにならなければなりません。海軍大臣を考えてみましょう。彼は国民の受任者です。海軍工廠や艦隊の任務を監督しなければなりません。支出計算書を作成し、成果や結果を報告しなければなりません。そのことによって褒美を与え、注意し、罰するのです。その中で支援し統制されるのは、海軍予算の報告者によるのであり、彼は権力を行使することを自分自身で学びます。少なくとも両者とも議会に対して責任があります。以上は理論上の話です。

実際のところ、物事は別な風に行われます。〈海軍〉が議会の調整を撥ね付けているのを誰でも知っていますし、同時にそれは組織の思い上がりであり、間違いや欠点を隠すのは個人の関心にもなります。そして多分、大規模な御用商人たちの利益も同じ感覚で作用しているのです。〈戦争〉に関する事業、土木事業、郵政や電報や電話に関する事業が沢山になってきてもそう言えます。しかし、海軍や戦争に関しては抑制する反対行動が、他の何処よりも強いのです。何故ならそこでの秘密は慣例的であるからです。取分け個人の勇気と祖国愛は、自然と他の目立たない美德を圧倒しています。最終的には、〈反動分子〉のエリートが、自然と軍隊の仕事に就いています。

これらの理由は、上着を着た大臣が不用心に管理するのを望んだりすれば、余りに危険であることを説明すれば十分です。もしも自分自身のことを少し考えれば、彼のやり方というもの、一番目には先ず軍隊の情熱や活力を模倣することにあります。それが最高の阿諛になります。二番目には軍隊事務局の礼儀正しさを事あるごとに模倣することです。それは権威ある高官たちの関心を和らげて和解させます。三番目は、譲歩しながら指揮することです。つまり人々を保護しながら自分自身を保護することです。そうすればフランスはついに愛国者の大臣を持ち驚くべき仕事をして権力にも恵まれ、彼は私たちの味方と見られて軍人としての威光を回復させます。敵が見ても同じである、と建設や戦闘の技術者たちの全てが言ったり言わせたりしますし、書いたり書かせたりします。それは栄光になります。

しかし、自分だけの栄光に無関心な大臣は事実から動きます。その結果に従って判断します。階級を表す金モールの本数を数えないで、砲弾の数を数えます。頓着せずに批判し、ずけずけと確認する人です。彼に栄光があるとあなたは思いますか。外国の新聞で、彼は称賛されるとあなたは思いますか。そう思うのは少し無邪気すぎます。それは民主主義的組織の難しさの一つであることに良く気付かされます。恐らく、それが基本なのです。私たちの信頼に値するのを望む大臣は、報いられるのが下手です。

(一九一三年一月十六日)

六 情熱を鎮めよう (CALMONS LES PASSIONS)

その賢者は私に言いました、「優しい思想の伝道者よ、ことを始めるにはあなたの情熱を鎮めて下さい。もしも権力を監視したり、儀式を無くして点検することだけが重要であったなら、私はあなたの味方です。そして信用は共和制国家の死であると良くあなたが言うように、私も言います。〈抜け目ない男〉である首相ブリアンの印象は、少しあなたの精神を利用し過ぎているように私には見えます。あなたが言っている彼のことは本当です。それ以上に彼のことは良く知られてもいます。一九〇〇年に彼はアナキストでしたが、今は既に離れているのをあなたは知っていますか。ですから言葉や行動から公然と憚ることなく認めない学説を非難する習慣が、彼には決してありません。利益のある発展へ身を委ねない政治家とは如何なる人なのでしょう。彼らの名前を挙げましょうか。でも、あなたに名前を挙げる必要はまさしくありません。私の記憶から抜け出ています。人は忘れます。忘れることは大変に良いことです。あなたはかなり歴史が好きでないように私には見えます。しかしながらあなたは今、歴史家になっているのです。この私は、人々が自分自身を予告するものに従って、先ず彼らを理解します。何故なら私が彼らに付与した趣旨に沿って、私は彼らと別な風に戦わなければならないからです。それは勝手に不必要な仕事です。私は彼らの行為に期待します。あなたが愛していない人間は大臣ですが、彼は大臣になったのです。もしも大臣が事業をうまく操るなら、これからもその仕事をやるでしょう。しかし市民が全て和解するための〈新しい精神〉を大臣が蔑ろにするなら、遠慮なく地面に投げ出されるでしょうが、大臣は非常に巧みです。何と気分が悪いのでしょうか」。

私は、その教訓を受け入れます。利用したいと思います。しかし何かが邪魔しています。その男の出世ややり方は全てが新しい制度であると私には見えますし、権力は上手に仮面を付けていました。人々の間では大変に変わり易いものでした。彼らは全員がそうではありませんが、政治的情熱がない者を私は決して理解しません。彼らは、単純で純粋な成功以上のものを何か告げています。平等と正義の味方です。そして彼らの表明は、それらを少し手に入れています。世論も関係しています。国の名に触れたがっています。結局のところ彼らは、国民からの受託者の役割を努めているのです。その次に私は、彼らが野心家で小さな城門を通っているのを良く知っています。そうです、勿論彼らは自分の意見を野心と共に引きずっています。それ故に彼らはそれらの野心を通らせようとします。荷物を作り直します。それを投げ込んでいます。

彼は全く純粋な〈政府〉であり、自分の権力を救う以外の考えはありません。つまり人間を操って打ち破ることです。少なくとも警官です。その種においては自由意志を持った職人です。決して市民ではありません。磁石が鉄を引き付けるように彼を引き付けながら、危険人物というものは大なり小なり何らかの権利を持っています。それを保持すること以外に、他の政治制度持つことはありません。彼はそこを通ります。子どもは、この秘密の権力にとって貴重な道具です。彼は〈経済〉の王様になり、〈政治〉に少し保たれすぎながらも吟味し始めます。〈共和国〉の新しい人物です。彼が範を示すことは危険であり、静かに流れている情熱も危険なのです。

(一九一三年二月二日)

七 子供たち (LES ENFANTS)

先日、私が子供と大人の違いは基本的に何であるかを自問していた時に、次の言葉に辿り着きました、「子供は専ら大人に依存している。全く外見的なことではない。すなわち子供は少しも強くない」。というのも通常の状態において、子供は自らの生計のために事物を作る必要がないからです。もしも子供が作るとか耕すとかしても、それは遊びのようなことでしかありません。それに反して産業は子供の役に立っていますし、それは祈りでもあります。実際に子供は弱いので、余りに他人の情念に依存しています。従って、もしも子供が人生という厳しい学校から何かを学ぶとするなら、それは先ず他人の情念を見抜く術であり、それらの情念を変えることでもあります。それ故に子供は、自然に追従者になります。そして恐らく、取るに足りない決まりや条件であっても、容易に分かることはありません。何故なら祈ること、加護を求めること、接触すること、結局は気に入られることが重要であるからです。希望が全てを可能にします。そして重大な事が起きると、全て奇跡のせいになります。

この考えに従えば、強く組織された遅れた社会のことを私は考えたのですが、今日の私たちの進歩というものにとっては奇妙です。今の風習は余りに良く理解されています。それらの風習は全てが生きております。あるいは寧ろ生きていたのは、大地の肥沃と動物たちの豊富さによって、人間の生活が大変容易になる環境においてです。従って子供たちは何も知らずに、最も良く知られている条件や、最も単純な法則にびっくりするのです。例えば、もしも弓の射手が或る儀式や呪文を顧みないで無視したならその矢は雄鹿に当たらない、と子供たちは固く信じます。その信仰は屢々出来事を変えるに違いないと直ぐに理解されます。しかし出来事が信仰と違って偶然に起こる時、例えばもしも儀式を無視しても雄鹿に命中したなら、子供たちは直ぐに何か超自然的なことが介入していると考えます。例えば、多分その獵師の祖先が儀式を彼に代わって行っていたのだと子供たちは言います。この点についての子供たちの理解力を妨げるのは誰でしょうか。政治家が良く言う悪習です。

そこでの未開人たちは、基本的に社会生活を営んでいます。彼らは年齢や階級に従った法規、義務、権利、特権を定めることや、他人が行うか行ったことを正確に行うこと、要するに世論を崇めることしか真面目に考えません。彼らの世界は少なくとも人間的です。あるいは寧ろ、彼らはぼんやりと他人を見ている人間世界を通して考えます。彼らが知っている人間に従って何時も事物を判断し、雄鹿や熊、風や雨、太陽や月に向けた儀礼を何時も気にしています。そして彼らの産業がそのような方法で築かれたなら、殆ど進歩は無く、びっくりする必要もありません。

発明者は何時も誰よりも先見の明がある人であり、観察によってそれを掴み、事物のメカニズムを試みます。その時、第一人者はその力で変えて行く思想を持っています。如何なる礼儀正しさもなければ、祈りもありません。そして、それが事物における科学の始まりでした。それは祈りや契約や脅しによって統治する術よりも、私に言わせれば未熟です。全然進歩はしていなくて、我が国も同じでした。知性には二種類あり、一方が他方を導きます。

(一九一三年二月六日)

八 成功は何の証でもない (LE SUCCÈS NE PROUVE RIEN)

私たちは統治する術として余りに高度な思想を手に入れています。私は、成功しか狙っていない者の言い分を聞いています。有名な政治家たちの格言集に、人は何か深遠さを虚しくも探します。彼らの褒め称えられてばかりいる洞察力というものはラ・ロシュフーコーの有名な英知に止まります。彼らの感情を信じることは決してありません。利益になるものだけを信じています。人間を偽善や卑劣と見做します。何かの利益を示すためにしか話しません。要するに犬を調教するように、服従させているのです。これらの格言集は何時も本当のようですが、成功しすぎてしかありません。

私たちのもっと高貴な活動が、比類なき喜びを与えるのは本当です。しかし、もしもその高貴な活動がその度に私たちに害を与えるのであるなら、贅沢な楽しみは諦めます。人間は正しく、自然には寛大です。同様に自然には臆病で貪欲でもあります。しかし、それ故に人間は自分の経験によって成長します。もしも自分の才能はつまらなくて大したものではないと何時も認めていたなら、彼には如何なる苦しみもありません。この訓練は直ぐに行われます。動物的特性が私たちに強く捕らえています。あるいは鞭への恐れや砂糖を欲しがって跳び上がります。最初に跳んだ飛躍だけしか価値がありません。「私の人間としての美しい青春よ、さようなら」。しかし、それは一瞬の閃光でしかありません。最早、それ以上考えても意味がありません。というのも人生は困難であり、感動は殆ど得られないからです。

人間の本质を厳しく判断した者たちは、ヒースが追従者に塗られる時のように、美德を妨げている状況を余りに斟酌していません。誠実に人間から人間へ取り扱おうとしていた全ての人々は、美德が自然に広がって行く方法に関心したかもしれませんが、せめて罰せられることは決してありませんでした。ナポレオンは兵たちを実に大胆に使いました。兵たちはナポレオンの人格に完全に忠実でした。ナポレオンは勝負に負けても潔かったのです。というのも他人の美德に賭けていたからです。そこから彼の歴史は奇跡的になります。人は心の底ではそれを愛しています。何故ならその人間を信用していたからです。人は何時も戦いが好きです。何故なら戦いは何の約束もなく多くのことを要求しているからです。

しかし、その他の政治家は、取分け最高の悪貨を信頼しながら、人間を冷淡に買収し、何時も大変な成功を取めます。腐敗が早く広がります。一人ひとは僅かばかりの恥ずかしさから冷笑的な説教者になります。老いた宮廷人が自然に弾薬手になるようなものです。その結果、これらの教説はあらゆる者への言い訳の代わりになるためのものです。「人間には内気以外の美德は決してない。先ずは彼を裸にきなさい。そのことで彼はあなたに感謝するでしょう」。そんな風にして心底から軽蔑するのであり、経験によって証明することが直ぐに確実に生じるのです。人間は醜い動物であるという考えがそこに還ってくるように、びっくりする程の力を与えます。それ故に成功は何の証でもありません。

(一九一三年二月九日)

九 些細な力 (LES PETITES MOYENS)

官僚が私に言いました、「要するに、あなたは至る所に腐敗を広げているのだ。それはあなたが民主主義の教育を行うのを望んでいるからである」。悲しいかな、擦り切れた月並みな思想で私たちが生活してきて既にどのくらいの時間が経つのでしょうか。市民は正義のためには、少なくとも正義を愛さなければなりません。純粹に幾らかの個人的利益を愛するのか、あるいは全てを失うのでしょうか。如何に哀れな教説であり、抽象であり、自然との接点がなく、結局は如何に思いやりがないのでしょうか。あなたは、母親が子供を上手に打たないので、子供が母親を愛しているかどうかを疑っているのです。あなたは、見分けることが愛を汚すようにならないかを心配しているのでしょうか。その様にして短絡的見方をした結果、それに従ったその人の愛が基調になり、私たちの感情が主張するものようになるのです。しかし、それは非常に馬鹿げています。人はその人の将来を気遣いますし、私もそうです。しかし、人は自分自身と愛し合いません。愛することとは、自分以外のものを愛することです。そして、それが最も生き生きとした喜びの源泉になります。少なくとも先ずは愛さなければなりません。例えば自己に従って思考することは愛することです。それは食べるとか飲むことではなくて、豊かで高潔な好奇心によって真理を探求することです。しかし、思考する習慣を持たない人々は、大変に退屈であると信じます。教育の方法というものは、彼らをそこに向かわせて、何らかの付随的で内部的な魅力から先ずは動かすことです。

有権者の話に戻ります。そして見分けることが、正義を愛するためには大変良く整理していると私は言います。というのも〈人民の友〉としての運動に熱中させられるからです。結局のところ郵便配達人とか税関吏とかの、何らかの辞令に向かわねばならないからです。そこから彼は政治的無気力から抜け出ます。そして更に注意力が目覚め、〈権力〉に対しての市民としての関係を敢えて考察します。そこには自己以外の何らかのものがああります。無私のものであり、結局のところ〈愛〉の始まりです。つまり関心を持ちます。この言葉は何時も個人と関連づけたがっているもので、間違っって受け取られています。それどころか殆ど何時も何かに興味を持つことは、自分自身を忘れることです。実際には自分自身の力を尽くし、努力することです。そして以上は、如何にして市民が小さな仕事で駆け回るかですが、そうなるや否やあなたは彼から最初の一步を教わっていたのです。以上は仕事が先ず、如何にして大変に誠実な友人たちを〈共和国〉へ向かわせることが出来るかです。何故なら大部分の国民は、公人としての生活に興味を持つや否や、それが〈共和国〉になることに気付いて下さい。しかし怠けて、最早そのことを考えなくなるや否や、それは独裁になります。いわば今日の政治的宣伝というものは、少なくとも関心と希望に目覚めること、あるいは回復させることにあります。始めることは、何時も些細な力で行われます。子供は、数字に興味を持つ前に、紙幣に興味を持ちます。

(一九一三年二月十日)

十 戦争の理念 (DOCTRINE DE LA GUERRE)

戦争の問題について、民主主義者や取分け社会主義者たちは大変に長い間戦争に否定した儘でいました。彼らは最も強い〈権利〉も否定していました。戦争の美德も否定していました。軍隊の専制も否定していました。その意味では〈祖国〉も否定していました。最も穏健な人々は、否定ばかりの夜の中で模索していました。そうではない他の人々は、猛然とそこに身を投じていました。

肯定もしなければなりません。〈最新部隊〉についてのジョレスの本は、理念に関する最初のエッセイです。しかし、理念は至る所で思考して教えられる必要があります。軍務が実際の職業であった時代において、戦争の新理念が嘗て別のものを教えていたように、それを養成しなければならないのは良識です。

健康な人間であれば全員が、自分の本来の職業の外に軍務に就きます。そこから軍務は最早如何なる特権も威厳も人に与えないと私は理解しています。教練教官たちは、橋の技術者とか郵便局長と同じ肩書きを持った公務員です。そのことは彼らが最も高級な倫理的影響を主張しているとは決して言いたくありません。小学校教師たちと同じ肩書であり、教練教官とも同じです。勿論、彼らの威厳は少なくともその学識によっています。

戦争は最早、倫理の学校と考えられておりません。確かにお金持ちのためであると良く理解されています。何故なら人々は、働けば生活が容易になるからです。戦争は一種の必要性が試されます。それは男性のエネルギーを有効に興奮させると同時に、不平等を正当化します。この考えから、お金持ちの中でも最も優秀な者は軍務を志します。しかし、国を守るという崇高な使命は、今では国民全員のものであります。ところが自分の手を使って働く者たちは、何時でも男性のエネルギーを行使し、人々のために生きて、結局は〈業務に就く〉ための機会を持ちます。労働者たちにとって平和は意気消沈させる休息ではありません。それは既に戦争であり征服ですが、事物に対するものであり、事物に基づくものです。〈戦争〉は美しくありませんし、望ましくもありません。

結局のところ戦争とはまさしく自衛です。それは何時も断固とした暴力行為への回答です。この原則というものは新しい組織や未来の政治次第です。取分け、同盟体制は著しく変化されねばならないことが難なく分かります。しかし、戦争の方法は特に根本的に変わらなければなりません。というのも戦争は最早、負けても良いゲームではないからです。何故ならそれ程勝つことに希望を持つからです。戦争は、目的のためには全てが自由です。しかし勝者は相手の優位を全て拒否しなければなりません。その代わりに、敗北は決して受け入れません。平和は、本質的に最初の状態に戻るのを想定します。例えば一方の人々を裏切ることが出来るのは、他方の人々を救済するためであるという思想そのものが野蛮な時代に特有なものとして現れます。その時に職人や商人と一緒に領土を生産する者たちは軍人の家系になりましたし、人に譲ることも出来ませんでした。その新しい制度によって〈祖国〉は一つになり、不可分にもなるのです。

(一九一三年二月十四日)

(次章へ続く)

十一 救助 (SAUVETAGE)

この頃、新聞が素晴らしい論争を語っていましたが、十分に注目されていませんでした。事はパリ行き普通列車の、ベンゾールを入れたトイレの穴の一つで起きたことでした。トイレの穴は、誰もいない時には自然にきれいになっていなければなりません。しかし、何時もベンゾールの蒸気が漂っていて、忽ちふらふらになって仕舞いました。危険であるのは確かです。労働者たちには良く分かっていました。序でながら言いますが、強力な換気装置が働けば、恐らく危険はかなり少なくなります。しかし株主総会は、これらの費用を容易に受け入れませんでした。要するに、ブルガリア人たちが戦場へ行くように、危険なトイレへ掃除に行かなければなりません。そして、この出発は時々困難なものになりました。愛も憎しみもありません。ただ給料を貰う必要があるだけです。取分け調査することは大変に人間的な考えです。やるべきことがあれば、何時も十分に引き寄せてそのことを行う術を知ることです。彼らは臨検します。

ところがその日は、危険な蒸気が全然稀薄になっていませんでした。彼らは二人ずつ這入ります。その毒の打撃を最高に受けます。直ぐに退却します。そして、二人のうち一人はどうにか上手く逃げられましたが、もう一人は倒れて昏睡状態になって仕舞いました。最初の一人は既に自由に空気を吸えましたが、直ぐにトイレの穴に戻り、もう一人を救助する間もなく同じ様に死んで仕舞いました。

これらの事例は決して珍しいことではありません。でも余り強調して言われていません。戦争の話になると酔って夢中になる私たちは、顔を赤くしたり震えたりして、ついには英雄の実例に心躍らせます。これらの興奮は、自分の手では決して働かない人間をせいぜい生き生きと刺激します。少なくとも話をしたり、ものを書いたり、思考を結びつけて構成立てます。こうなると真面目に何もやらない者の方がはるかに良いのです。彼は他人の労働で生活するだけです。エリートが好戦的なのは道理に叶っています。それは彼の名誉であり美德です。それが証明していることは、私たち人類は自分自身を軽蔑するのを受け入れる訳にはいかないことです。

同じ議論をしても、お互いに戦う者たちには殆ど影響がありません。私が聞いているのは、恐るべき敵と絶えず争っている者たちであり、地崩れ、爆発、窒息、電気火花、歯車、ベルトの音です。これらに対応するには、いわば絶えずそうですが、慎重でも無謀さが自然です。危険が倍加すれば、何時でも注意力も意志の力も倍加します。彼らは、老兵が戦争に慣れたように、直ぐに慣れます。この様にして絶えず彼らの行動は成功に向かって秩序立って整理され、人員確保への配慮が何時も作戦を上手く導く助けになります。決して諦めたりしません。そして、そこに実際の軍人精神があります。というのも爆発した怒りは、唯一可能な回復としての死への歩みとなり、だんだんと利用し得る軍事力を減少させるからです。そして現代の戦争はだんだんと工業化して、少なくとも最も危険なものの一つに数えなければなりません。従って英雄主義を説く者は一般に、そのことを知っている人々に、自分がそのことを知らないのを教えている人間です。その様にしてこの奇妙な見方を説明することが出来ます。汚れないで綺麗な白い手をした人間たちは、熱狂的な愛国者になります。汚れて黒い手をした人間たちは、如何なる興奮も抑えて平然

とそれらのことを考えます。

(一九一三年二月十八日)

十二 空想力 (PUISSANCE DES SONGES)

最も遅れた社会のことを考える時、そして古代ギリシアのことも同様に考える時、空想力に驚嘆させられます。彼らは、自分たちの周りにある何かの現実を何時も知覚していると見做しているのです。彼らは言います、「死んだ戦友が今夜私を訪ねて来ました。私はそのことを信じます。それは彼の顔でした。彼の声でした。彼は自分の名前を言っていました。私たち二人だけが知っていることを私に言ったのです」。そこには死者たちが実際には死んでいないという信仰があります。死者たちは別世界で別の人生を送っているのです。

人体の構造を注意深く考察しない限り、何であれ強固に反論出来るものは何もありません。というのも、偽りの知覚によるメカニズムが隠されているのはそこであるからです。望遠鏡に何か奇妙な肉体が見えたとしても、天文学者はそのことで天空が混乱するとは信じません。彼は望遠鏡を取り外して掃除をします。しかし、もしも何か余りに活発な印象によって眼が疲れていたなら、私は灰色の壁に亡霊を見たと思います。太陽の亡霊がその様に事物の間を駆け巡っているのを、誰もが良く知っています。そして、それを見分けるには一寸した注意力も必要です。何故ならその亡霊は紫色をしているからです。両眼を閉じる時は、真っ黒な荒野を見るのではなくて、ぼんやりとした様々な形のものを観察します。それらは恐らく夢の緯糸の最初です。同様に、熱とか血管の閉塞によって時計の音を聞いたと思い込みますが、その時の耳は耳の音しか聞いておりません。そして、何かの圧力で表面上の血液循環の血流が少しの間に何回も中断すると、指が蟻によって何回もちくちく刺されるように感じるのは、誰でも良く知っております。

要するに私たちが使う道具は、不変ではありません。熱とか疲労あるいは前例の感じに従って出来事が起こります。それは事物に関する私たちの感覚を、自然と多少なりとも混乱させます。現在使われて望遠鏡を想像して下さい。それは蚯蚓（みみず）のように伸びたり縮んだりします。私たちは両眼を別々に離別させることが出来ません。情熱はその度に何時でも必要な用心を忘れるのです。そしてベーコン(1)が強調して言っているように、何時でも涙を通して見詰めるのです。私たちは今でもその状態にあります。私たちの状態は、長期の協力や援助によってしか脱出出来ません。信頼と誠意を前提としています。自分自身を余りに評価したり非常識なことをやると思われている狂人は、直ぐにこの悲しむべき状態に再び陥ります。しかし議論のない一致や感情によるものは、やはり危険です。例えば交霊術者たちによって理解しているようなものです。取分け、もしも交霊術者たちの中にいたなら、詐欺師は交霊術者たちが望んでいることを仄めかして告げるでしょう。もしも最も見識のある人々がぐるになって人々を騙すとか、少なくとも司祭たちが天文学者たちや大変に饒舌な物理学者たちを監獄に入れることが出来たなら、実際に今日でも如何なる非常識が大衆に起きるのか、私には知る術がありません。

(一九一三年二月十九日)

(1) フランシス・ベーコン(一五六一～一六二六)は、既成の学問を批判して経験主義哲学を考察して、近代哲学の

基礎を築いた英国の哲学者・政治家である。

十三 中等教育 (ENSEIGNEMENT SECONDAIRE)

私は屢々、次のように言われている建築家に驚嘆しました。「二軒の家の間に、鋭角をもった辺の長さが等しくない土地があります。その土地に美しい家を造って下さい。家の全体は正方形で、部屋などの部分部分も正方形をしていて、二段になっている階段があり、各階には広い廊下と美しい部屋とベッドも上手く置かれていて、風通しが良く、明るい美しい家です。何か楽しそうに満足出来る家です」。その様な難問からは知性も養われます。条件が厳しくて密であればある程、より良い独創が生まれます。反対に広い土地があり、計画も自由でゆとりがあれば、私は何も良い成果を期待しません。それ故に一般には、ユートピア以上に凡庸なものは最早何もありません。障壁が無いからです。

かくしてその建築家のような創意工夫に富んだ技術者である〈大学〉は、余りに容易な勉強には苛立ちます。「私たちには完全な中等教育を行って下さい。少なくとも目的を考えて下さい。その方法には関心がありません。あなたにはそれが与えられています」。悪いやり方です。問題は余りに大きいです。というのも何故中国語の講座が設けられていないのでしょうか。もっと簡単なものが何かあるのでしょうか。旅費の給付制度、正規の学校での中国部門、資格、適切な待遇、中国の学生のための将来性を整備して下さい。そして中国語教育の有効性について議論して下さい。知識というものは有益です。努力も良いものです。そして如何に議論するのでしょうか。中国語を知っている人々は中国語だけで話します。そうでない人々は中国人が被る縁なし帽子を褒めます。この種の改革は、自由な土地に明白な真理を発展させる或る種の発明者を誕生させました。新しい思想の場所なのに、戦闘部署は厄介で押し込まれた土地で、古い思想の儘心の裡にあると言わねばなりません。例えば戦争の時でさえ、平和を思考することです。

しかし、私の本題に戻ります。本当の創造者とは産業の中で姿を現します。何故なら産業は彼を追い詰めるからです。同様に教育の創造者というものも、窮屈さに繋がっていなければなりませんでした。先ずは何が何でも確保することは、朝の二時間と夜の二時間の教育であり、週に五日勉強することです。十五歳になるまでクラスの先生は一人だけです。その後はせいぜい二人です。何故十五歳なのでしょう。何故二人とか三人にならないのでしょうか。私はこれ以上議論しません。その討議の場を勝手に制限するのは政府のやり方です。モリエールの喜劇『守銭奴』の主人公アルパゴンが言ったように、「少しの金でも高価なもの」なのです。厳しく不屈の状態からあなたは思想を誕生させます。それらの思想は押し合い、のし上がります。制度には観念が合っています。押された群衆のように最も弱い者たちが滅びます。しかし、それらの観念は他の人々に蘇ります。それらに肉体を与えます。自分を誇示するための地位がなくなるや否や、作家になります。彼は捧げます。本質しか言いませんが、皮膚の下の骨のように最後の最後が示されます。その様に私は〈中等教育〉を理解しています。それは全二十巻の百科事典ではなく、大変ぎっしりと詰まって中身が濃い一冊の仮綴じ本です。

(一九一三年二月二日)

十四 軍事問題 (LE PROBLÈME MILITAIRE)

市民たちが軍事問題の基本的原則を把握することは必要です。というのも専門家に任せていたなら、私たちは彼らに全てを任せることになるからです。或る日、彼らは民主主義制度が国家防衛と両立しないことを、私たちに分からせようとするでしょう。殆どが真実であると彼らは言います。それ故に 主として読書や議論や人為的でわざとらしい体験によって教育する全ての戦争主導者たちの制度を検討しなければなりません。それは新しい軍隊についてのジョレスの書物がそれなりに役に立つに違いありません。ですから私はその話に戻ります。

その本の中には軍民組織が書かれています。それは未来についての一つの見解です。その反対者は、その点についての議論に持ち込みたがっています。しかし、その本の全ての章の内容は忘れられており、そこでの戦争に関する現代の方法が批判されていますが、根拠がない訳ではありません。戦争を主導する者たち自身に倣って批判しているのです。詳細に見なければなりません。しかし結局のところ、これは私たち全てに提示されている問題なのです。

ドイツは我が国フランスよりも大変に多い部隊を持っています。この優位は誰もが知っている事実です。この問題のデータとして受け入れなければなりません。そういう訳ですから、最初の交戦で私たちが国境で大勝利を勝ち取れるでしょうか。先ず考えなければならない疑問です。そして戦争主導者たちは、次のように言って今日もそのことに答えていません。「人間は、何時までもずっと人間です」。しかし、この方法で私たちが守るのを期待出来るのに、決して十分な人間はおりません。結局のところ彼らが答えたのは次のことです。「それでもそれを試みなければならぬし、その機会を試してみなければなりません。というのも、もしも私たちが国内の力を全て集中させる準備をして、次に強力な攻撃をする意図をもって、守るのを遅らせて反対すれば、世論は取り乱すこととなります。あなたはフランス人を良く知っています。始めは熱狂的になりますが、直ぐに絶望したりして、色々です」。ありふれた考えは何と哀れで弱々しいのでしょうか。私たちは兵隊ごっこで遊ぶ子供でしょうか。私たちは未成年者で、直ぐに勝たねばならないのは誰でしょうか。

そして次に、結局のところこれらの最初の日々に勝利が可能でしょうか。もしも敗北が一人対三人の割合で確実であったなら、何故それを求めに行くのでしょうか。私たちの集団で最も優れた者が酷い犠牲に晒された時、私たちは何になれば良いのでしょうか。これらの条件の中でも彼は賢明です。先ず退役を望んだとしても、領土から遠い敵を引き寄せる効果があると見做すならパリの要塞の元まで同じであると見做します。敵の最初の発砲を先ず中断させる効果があると見做せなかったとしても、彼らの力を分散させてついには彼らの行動を感じさせるために、同盟を結ぶ力を可能にするように検討するのが成年男子です。力はその時平等化しております。敵は必然的に脆くなって広がった隊形を取り、そこを私たちは攻撃します。この戦術は災害の後と同じ成功に殆ど近いものです。その時に私たちは、無傷の儘の力を発揮出来るのです。そして、もしも国家の人物がそれに抵抗したならば、それには準備しなければなりません。私たちは未だ実際にはそれに決まっていないのですから。

(一九一三年二月二五日)

十五 伝統と自由思想 (TRADITION ET LIBLE-PENSÉE)

人々は〈伝統〉と〈自由思想〉を対比したがります。しかし、私はこの対立によって決して心を動かされません。純粹に想像上のことと私には思えます。私にとって宗教からの〈自由思想〉とは伝統主義者のことなのです。もしも幾何学や天文学やぐるぐる回って踊るような原子みたいな仮説で現代の宗教を、物質に関する全ての永続的な概念の最初の形態と比べれば、非常に新しいものであると気付いて下さい。同様に宗教から独立した道徳も、もしもアリストテレスとプラトンが一緒になれば、既に完全な体系を形づくっています。何らかの宗教史は、見事な創世記の後には常に退廃の歴史です。まるで大きな肉体から魂が抜けたようなものであると気付かない訳にはいきません。反対に自由な思考は、何世紀も超えて絶えず力強く飛んでいます。大空へ上がれば、何時も更に輝きます。大地に立ったなら、何時も更に強くなります。キリスト教徒は異教徒を嘲笑します。しかし、ソクラテスの弁明をプラトンの本で読むのは可能ではありません。それは裁判官へのソクラテスの話であって、人間の宗教に関する完全な規範を認める訳ではありません。

色々な宗教はお互いに否定しています。全てを理解するのは〈自由思想家〉だけです。彼は全ての人々の名誉を回復させます。例えば最も酷い未開人の愚かな迷信においては、空想を解明するための努力である空想の真実を認識する術を知らなければなりません。同時に死者信仰という最初の発想は、少なくとも人間の未来が改善され綺麗にしました。同じ様にキリスト教の真の意義は殆ど必然的に司教から逃げ、付随的で任意なものに結び付きます。力に対する道徳的要求を発見することがありません。ところがその上更に〈自由思想〉は、人体の構造や想像力の働きにしろあらゆる迷いが齎すものを理解することが出来ます。それらは夢の前兆や迷信を解明します。自由思想で結びついた人々の興奮の伝染が抑え難いにしろ、共通した事実の力によって感激や崇拜や熱狂による威信が既に出来上がっているのです。従って〈自由思想家〉は、人間の過去の全ての精神を豊かにする唯一の人です。

それ故に古典の研究は、精神を自由にしてくれます。思考するだけでいることは、狂人に固有のものであります。仲間の中で思考することが幻想家のやり口です。彼は〈巨匠たち〉と共に思考しなければなりません。自由意志に基づく創意工夫を人間の力というものの中で分散させないで、その力を自己に集中することが出来るのはそこからです。〈人間性の聖書〉を十分に読まなかった者たちは、学者であっても不安にさせる精神の軽薄さや不安定さを殆ど何時も示しています。彼らが専門としている研究でも同じです。そこから彼らは、平凡な経験主義に容易に陥ります。好きでもない懷疑論に結び付きます。しかしながら彼らは学問の実用性に何らかの薬を見出します。というのも事物の秩序が彼らを支える役に立つからです。しかし、学問の実用性を放棄した教養のない者たちは、直ぐに四方八方何処でも最初の奇跡を有り難がって感謝する軽い人間になります。要するに過去に〈人間性〉を決して見出さない彼らは、結局のところ現在にそれを見出すのであり、動物性と酷く混じり合っています。彼らは突然に無条件で愛国者になり、従順で批判しない修道士になり、最後には反動的な人間になります。何故なら彼らの精神は決して祖先を持

たないからです。

(一九一三年二月二六日)

十六 市民は放棄する (LE CITOYEN S'ABANDONNE)

私は通常の反骨精神を十分に持っている多くの人々と知り合いますが、彼らは言います、「私は良く調べられない。何も聞いていない。専門家たちに任せているのだ。もしも彼らが要求するなら、彼らが望むだけのお金も、三年兵役制も私は任せている」。それは統治される者や統治する者たちにとって少し安易すぎます。それは放棄であり、世界中にとっての眠りです。もしもあなたが考えなかったならば、統治者たちも殆ど考えません。もしもあなたが抵抗しなかったならば、彼らは決して工夫しません。彼らは決して長く求めなかったことを思い出して下さい。同じ観念が全ての人々にやって来ました。私は最初にやって来る観念を信用しません。それは習慣であり、機械的でしかありません。

私たちは、その時に所有している知識と共に、お互いに現実の方法で絶対に負けない防御の方法を工夫することが明白に出来ません。私はそれが困難であることを良く知っています。考えて探求しなければなりません。決まり文句や偏見から自由にならなければなりません。将軍たちがもしもそれを望んだなら、十分に工夫することを私は信じます。しかし彼らは、それを試みることさえなかったと気付きます。彼らに来る観念はまさしく皆の精神に最初に浮かんだものでした。まあ、それは大きな努力が見られないものです。新しい状況に適応し、思考に反応するようなものであると私は言います。苦労は兵隊たちに味方します。それは私たちの全ての力を議論し戦うための十分な理由になります。

誰も工夫しません。何もやろうとしません。一人ひとりが彼の前を歩いています。彼らは言います、「私たちは二年間で騎兵を養成することが出来ません」。それは殆ど本当のようです。奇跡を起こして六か月で新兵を訓練する将校たちのことを私は聞きました。新兵は農民だからで、彼らは我が国には事欠きませんし、既に長い経験を積んでいて馬のことを知っています。農民たちが言っていることも正しいと認めましょう。新兵の未来とか若い兵隊の味方かもしれない騎兵の訓練が、小郡とか村で行われるのを誰が妨げるのでしょうか。そんなことは考えられたのでしょうか。考えたかったのでしょうか。射撃協会は沢山ありますし、そこでの訓練は連隊よりも真剣に行われています。懐疑的態度や不安はあらゆる実用性を殆ど駄目にするので良く言われています。何故馬術協会がないのでしょうか。

取分け軍隊制度は知れば知る程、原則としてその制度は不可能と思われれます。侵略者たちの武器に対抗させることです。同じ国境で、私たちには決定的な勝利を齎すことが出来る絶大な武器の力がありません。彼らは必要なだけそのことを繰り返します。その頑固さは必要性に反対するものであり、何も生まれません。反対に私が必要性があると思われるのは、ドイツ人たちがパリを包囲した時にももしも彼らが大勝利を先ず獲得しなかったとしても数量的に優勢で、攻撃には全て有利な新鋭部隊の強力な攻撃に対して大変に弱いことです。私たちの要塞は、安木綿布で守って見えるようなものです。従って敵は直ぐに大勝利を望みます。しかし、その大勝利を彼らが拒む理由しか見ないのは誰でしょうか。

(一九一三年三月一日)

十七 フィレアスと三年 (LE R.P.PHILÉAS ET LES TROIS ANS)

昨日、私は肩を叩かれました。それは騎兵大佐の格好をしてすっかり若返ったR・P・フィレアスでした。彼は言いました、「私はあなたが〈共和国〉に止まっているとしても残念に思いません」。それに対して私は言いました、「勿論、私たちは共和国に止まることをあなたに告げます。私たちは何百万人もの頑固者です」。フィレアスは言います、「そして私は、あなた方は隷属状態に戻るだろうと告げます。もっと適切に言うなら、あなた方は既にそうなってるのです」。私は「よろしい、そのことを証明して下さい」と言いました。

彼は私に答えました、「私はそのことを証明します。ここであなたに三年兵役が提案されます。その方法は一つなのか、少なくとも窮余の策かどうか私は考えません。それは將軍たちを見据えており、私はそれを彼らの良心と見ます。疑いの余地がないことは、彼らは決心して投票するということです」。

私は彼に言います、「しかし、それが私たちに必要なことと見るか、そして私たちは何か他の方法に気付いていないかどうかを調べて投票します」。

フィレアスは言います、「とんでもない。あなた方は決して調べません。あなた方は政府の言うとおりです。政府自体が寛大な人々に従っています。それは避けられないし、物事の自然に従っています。將軍たちはあなた方の上司であり、彼らは統治しています。あなた方はこの分かり切った方式に対して空しく闘います。しかし、それは遊びでしかありません。本当の関係が何時も働きかけますし、時折姿を現します。あなた方は最早共和国におりませんし、或る時には最早そこにいることすら信じられなくなります」。

私は言います、「忌々しい。私たちは共和国にいるし、將軍や大臣たちであっても国民の奉仕者であることを私たちは証明します。そして私たちは、極めて明瞭にあらゆる人々に言います。私たちはあなた方の計画を投げ出します。他の計画を探して下さい。もしも何も良いものが見付からなかったなら、立ち去りなさい。あなた方の後任者が就くことでしょう」。

フェアリスは言います、「今度は不可能です。何故なら先ずあなた方は、その者の後任になるためには統治がないからです。急進主義者たちには思い切りがありません。従って不可能です。何故なら統治危機は直ぐに大統領の危機を導きます。あなた方は乗り出さないで危険にさせているからです。そして、その底では全てが不可能になりますが、何故でしょうか。あなた方がやらねばならないのは、ロシア宮廷とのかなり良い関係の日々以後を決定することです。二国間の国家元首がその上で結びつくことです。何故ならフランス国民の世論は約束され、契約され、期待されていたからです。何故なら別な風に行動することは、同盟に背くことであり、莊嚴に強固にしに来た人々を傲慢に立て直すことになるからです。あなた方は捕らえられます。あなた方は償います。最も小さな自由の痕跡もなく、あなた方は本質的な討議の中で理解します。建言権もありません。友よ、フランス国民が二つか三つのこの種の経験によって教えられる時、フランス国民は絶えず政治に興味を抱きます。私が期待するのはそこなのです」。そう言って、この恐ろしい人間は私の答えを聞く間もなく、市内電車に飛び乗りましたが、私は今でも答えを探し求めて

います。

(一九一三年三月二日)

十八 名馬たち (CHEVAUX SAVANTS)

あなたは間もなくエルベルフェルの名馬たちの噂を聞くでしょう。それらの名馬たちは人間よりも計算に勝っていて、例えば数秒で六つある数のうち一つの数字の四乗根を求めて仕舞います。数学者のオイラーは孫娘に計算をさせて楽しむ時、百までの素数の六乗の表を頭の中に作成して、現代の九九の表を覚えるようにやっていたことを私は本で読みました。従ってオイラーは、マホメッドの馬と競うことが出来たでしょう。しかし、少なくとも記憶力のことは良く注意して下さい。頭の良い人ならもう少し手探りして、もっと先を考えたくになります。でもオイラーの頭の良さは、多くの数字を記憶に留めていたことにあると誰もが言いたいだけです。人間であるオイラーの中には、少なくとも人間が生んだもの全てを記憶に留めている馬のオイラーがいたのであると言いましょう。

本当のことを言うなら、それは私が今まで一番びっくりした見世物です。その馬は何も忘れないことを知らないのでしょうか。あなたの処にやって来た最初の荷車引きは、その事例を幾つも見せてくれます。従って馬に教えるものには限度がないと私は理解しています。恐らく、如何なる動物でも構いませんが、それは褒美に関係して来る条件次第だと思います。知性とは、誰でも計算すれば理解出来るような機械的な勉強を支援することよりも、それを乱すことが多いものであるとさえ私は言います。それ故に人々は恐らく会計をやる馬を作るようになるのでしようが、計算をする機械は常に苦勞することがありません。

本来の人間とは、創意工夫します。獵犬は火が好きである話を私は聞きました。暖炉に薪を持って来て並べている間、獵犬は希望と忍耐を表します。炎が輝くや否や、礼拝するようにひれ伏しますが、時には火を付けようとしていた女性が何か他の仕事をやろうとして、薪や紙やランプを全てそこに置いて行って仕舞いました。その時、犬は一種の熱狂に陥り、紙やランプに吠え、両方に懇願するのです。もしも犬の口に紙を取らせて、ランプに火を付けて燃え上がらせ、小さな薪に火を付けるように調教したなら、その犬は独りきりで火を付けることが出来ただろう、と話の語り手は言いました。というのもこれらの行動の全ては、犬を満足させるものであるからです。放って置かれた儘の犬は唸り、積まれた薪や用意された紙や蓋を開けたランプを前にして何度も吠えていましたが、火を付ける考えは持ち合わせていないのは何時ものことです。記憶は動物的です。独創は人間的です。

(一九一三年三月八日)

十九 三年兵役（LES TROIS ANS）

最高軍事裁判所は、三年間の兵役に戻すことを満場一致で要求しました。それに対して政府は、勝利しやすくなる将来の保証に期待しますが、全てに影響して来るのは明白です。それは抵抗するためには十分な論拠です。実際に、もしも議会の掛け値なしの投票が私たちに平静さを取り戻すことがなく、私たちが熟考し議論し研究する最低限の期間も命じなかったとしたなら、私たちの代表者数は非常に減少することになるでしょう。

私たちは戦争の準備を無視していました。急進的政治は弱体化してしまいましたが、その中で先見の明を欠いていました。国は防衛体制を厳格に取り入れました。一九〇五年の二年兵役法はそのことを明白に示していましたが、同時に同盟維持や軍備は行政部に委ねていました。従って一方では、私たちの権力集団が国の活動によって不当な攻撃を退けるのを目指して研究することは決してありません。反対に、兵営にいる部隊と共に断固として攻勢が準備されています。それと同時に相関的に私たちの同盟は強固にされ、ドイツが無視出来ない敵の集団において、今の我が国が積極的な一員であるような方法に導かれています。私たちは徐々に疑うこともなく、殆ど脅迫的な態度を取っていました。そして、オーストリア側のヨーロッパ勢力圏の最近の変化は、平和がだんだんと私たちの意志次第であるようになっていきます。従って外交官の仕事は、議会の平和を望む意志を無駄にして仕舞いました。現代の統治者たちが私たちの甘えや高度な必然性を激しく感じさせるような時代になっています。私たちには権力の圧力があるにも拘わらず、政治的に何時も忠実に私たちの国の指導者を自由に肯定する勇氣があるかないかを知ることが重要です。

国の誇りのことを私たちは余りに良く話しますが、盛大に何度も肯定した主義に対して、私たちが抵抗もなく意志の目覚めさえもなく、必然性に任せているとするなら、その誇りを如何にして立派に守るのでしょうか。というのも、何処でも共和主義の思想が酷く嫌われ、今の私たちの行動は民主主義組織や平和を強く望む政治が結果として国の安全と両立しないことの証明を終えたことを、人々は十分に願っているからです。人々は私たちに本当の共和国を公に認めないのを要求しています。急進主義者たちの間違いを公に認めることを彼らに要求しています。私たちの真の指導者たちが同盟を準備し、防衛を組織する者たちであることを、私たちが最終的に認めたことが望まれております。国民主権は全く喜劇でしかないことが望まれております。

事件は決して単独で起こりません。秩序は先ず権力者から回復されなければなりません。将軍たちは服従しなければなりませんし、大臣たちも同じです。彼らの従属関係は余りに忘れられています。議会はこの催促に抵抗し、ヨーロッパの先頭に立って、防衛では決して負けない覚悟を極めて明白に主張しなければなりません。しかし、それは嘗ての平和への決心よりももっと決然とした努力です。というのもそれは、あらゆる脅威に対しての意志であるからです。その後で敢えて言うなら、高慢の鼻をへし折った後でなら、三年兵役が討議されるでしょう。

（一九一三年三月十日）

二十 ヘラクレス (HERCULE)

人間たちには、ヘラクレス伝説以上に美しい姿になったものは何也没有ありません。最高の規範に近いものです。神々や戦士たちさえも小さく見えます。私はホメロスの美しい印象に喜びますが、決してそれらの印象を崇めません。私はそこに恨みや猜疑心や兄弟殺しの怒りしか見ません。あらゆる権力者の前で人間たちは臆病者であり、観念しています。それらの権力者とは雷であり、ペストであり、嵐であり、無敵の運命です。「決して長く生きませんし、永遠の存在である神々と戦う者です」。彼らは人間の敵でなければならず、鎧と大きな兜と槍を持っています。敵も彼らに似ています。その時は彼らに激しい怒りが湧いてきます。彼らは大空と大地を忘れます。所謂大変に良く話をする人を見付けます。彼らも大変に話をします。情熱には何という光でしょう。

しかし、ヘラクレスの話を引用することは出来るのでしょうか。この人物は殆ど話をしませんが、決して憎みもしません。私は昨日、頭がライオンの皮膚をしたヘラクレスの上半身を考えて見ました。それが古いのか現代的なのか私には分かりません。私は、有名なイマージュを再生したりして彼の上半身を理解しませんでした。けれども彼は、大変にはっきりと私に話をする人間の行為を持っていませんでした。その頭は如何なる感情の印もありませんが、完全に優れています。十分に睡眠した後のように、全てがすっきりとしていて元気そうです。自己についての瞑想は下らない印象です。それに反して尊敬する心も宗教もなく、事物に身も心を捧げる実際の完全な注意力をもった印象も私は決して見ませんでした。

事物とは七頭蛇のヒドラであるか、あるいはならず者です。それは無情な力であり、友情も憎しみも考えられないのと同じで、戦争も平和もありません。破壊が問題で、遠慮がありません。ヘラクレスの仕事のことが話されます。彼は、戦争がその名に値した唯一の競技者です。従って人間の姿をして挑発も脅しも表しませんが、少なくとも注意力だけは表します。沢山の頭を持ったヒドラとか火を吹くカクスは、彼にとっては事物です。事物の鍛冶屋でしかありません。怒ることもなく叩きます。決して二回は叩きません。恐怖もなければ復讐もありません。

この型の人間と左程遠くなかったマルクス・アウレリウスは〈悲劇役者〉の征服者という言葉で判断して考えます。偽りの神々は顔をしかめます。勇気とは熱病であり、胆汁によって作用された思いであると私たちは信じたいと思います。トロイアの王子ヘクトルの息子は、最早父親を覚えていません。大きな兜や恐ろしい白鷺のお陰で涙を流します。しかし、如何なる子供もヘラクレスには微笑します。何故ならヘラクレスは決して怖がらせないからです。彼は決して支配しません。決して命令しません。ヘラクレスは行動します。その次に何時も無私の思想が目的を探します。世界に必要な仕事は何であるかを探します。彼は歩きます。恐らく、彼には多くの記憶もありません。彼の思い出は腕や足にあります。彼は歴史を創ります。人々は彼のことを語ります。そこには思索家があります。お手本があります。神があります。

(一九一三年三月十八日)

(次章へ続く)

二十一 信仰、希望、慈愛 (FOI, ESPÉRANCE, CHARITÉ)

何時も〈必要性〉のあるような顔付きをしている宗教の力に対して、私は〈信仰〉と〈希望〉と〈慈愛〉という三つの美德で戦います。そして私はこの偉大な戦いが如何に広がって行くかを単純な例で示したいのです。ここに〈数学〉は何も分からない少年がおります。以下は、信仰も希望も慈愛も持っていない先生の口から〈力〉が如何に話されているかです。「この子は、全然苦勞することもなく筋が通らないことを言っている。彼は理工科学校へ行けないだろう。諦めなさい。誰もが理工科学校生になれる訳ではない。でも私は期待する。あなたは出来る限り勉強したいですか。それではその可能性を考えてみよう。この子は頭が良くない。私はそのことを良く言って来た。そのことは言わなければならない。全てを理解したくて誰もが自分の適性を考えずに、あらゆることに関心を持つと混乱は大きくなる。もしもあなたが眩暈を起こす人間であったなら、屋根葺き職人になってはいけない。それは馬鹿げていますか。勿論、恐らく馬鹿げたことでなければならぬ。いずれにせよ、色々な人々がいるのですから、色々な人々がいることも認めよう。この現実を受け入れよう。一人ひとりには素質がある。腕を伸ばして街路のガス灯に明かりを灯す背の高い人がある。椅子の上に登る小さな人もいる。平等は事実に対峙しているのだ。それは可笑しい考えである。ですから馬鹿な男たちは背の高いベンチに座っていなさい。あなた方には気に入った行為でしょうし、静かにして下さい。〈勝利する生徒〉は黒板の前に来て発表しなさい」。

その後、私たちは〈勝利した〉生徒に再会します。彼は将軍とか技術者とか校長になっています。ところが善き馬鹿者たちは、命令によって大地を動き回っています。

しかし、若い馬鹿者と向かい合って望まなければならない、と私は言います。いわば美しい言葉を話しましょう。そして隠している宝物を広げて見せましょう。私はそのことを教えたいのです。第一に私は、彼を愛さなければなりません。つまり彼が言う愚かなことを全てより良く解釈します。未開人のようにそれらを待ち望んだり、大きくしたりしないようにします。恥をかかせたり、参らせたり、粉々にしないようにします。例えば、急いで私は昔言った何か非常に馬鹿げたことを見付けて、それを彼に話します。人間というものは急ぐと愚かです。従って、私は子供が大変に意味があると言わなければなりません。そうでなければ、私は子供を教育したいなどと決して言う必要がありません。先ずは〈慈愛〉です。

その後には、すぐ傍に〈希望〉があります。というのも、例えば永遠に馬鹿にする脳の構造のように、今後の結果を限定する避けられない配列が事物の秩序にあるということも私は最早決して考える必要がないからです。〈望むこと〉はまさしくそのことを否定します。それは次のように言うことです。「もしも私が子供を軍隊に任せたなら、子供は殆ど思想もなく、論理もなくなります。ところが私は軍隊を変えたいのです」。〈私は望む〉と言うことです。そしてそれと同時に、思考することです。〈私は何も出来ない〉のは臆病なのです。

〈信仰〉は内面の美德であり、希望と慈愛の二つのものを培います。それは最初の道徳的感情です。「私は行く。私は変わる。正義がある。人間性がある。疑うことは最初の罪である。失敗

は何も証明しない。何も証明出来ない。少なくとも私は本当の力をもっと強く、もっと忍耐強く、もっと創意工夫に富むようにしなければならない。〈勝利した生徒〉よ、黒板の前に来なさい」。

(一九一三年三月二一日)

二十二 計算する馬たち (CHEVAUX CALCULATEURS)

最近私が話したことがあるエルベルフェルの計算する馬たちは、それ以来大変な評判になっています(1)。如何に教育されているのか、それは調教者も語っていません。でもこの動物の見世物師の狙いは、全ての同業者のように私たちに教育することよりも、びっくりさせることであるのは極めて明白です。というのも、もしも種馬のムアメドが或る数字又は幾つかの数字を黒板の前で見て脚で正しい数を打つのを少なくとも立証したかったなら、直ちに私たちはこれらの新事実を他の同じ様な種類の事実でもっと有名な多くのことと比べることが出来るからです。何故なら3の数字は、例えば9の数字と全く違って、その馬は良く識別することが出来たからです。もしも我慢強く関心を持ち続けたなら、その一頭の馬でも、もう一頭の馬でも確実な方法で反応することが出来ます。

老いた騎兵は、馬たちの一頭が小型パラソルを見たら直ぐさま気取るように、騎兵に知らせていたことを語ってくれました。そして騎兵たちも直ぐにそのことを理解していました。その馬は多分、美しく着飾った女性と出会うと姿勢を正して歩き、騎兵が優雅に見えるように乗せていたのです。その後、騎兵と馬との関係は馬の脳に保存され、小型パラソルを見たら騎兵が拍車で打つ必要はありませんでした。直ぐに気取って歩いたからです。そして動物の知恵は、容易にこの種の記憶に還元されると言われますが、人間にあっては愚か者と見做されます。

従って、馬の見世物師は別のことを強く望んでおります。彼の馬たちが人間のように計算することです。そこでは立方根とか五乗根が一瞬に分かるのです。しかし、まさしくそれは証明して欲しいものです。何故なら、足し算や五乗根を導き出す間には、もしも考えるなら多くの計算が介在しているからです。そして確かめることが出来る時に、最終的な演算が近似法や吟味によって行われます。そのことはかなりの時間と多くの記述が求められます。

以上は恐らく、有名な生物学者のカントン(2)が言っていたことです。その間に彼の前でそれらの経験が語られ、哲学者や数学者たちが大きく眼を開きます。彼は自問します、「こつがあるのだ。私はそれを見付けねばならない」。そして、彼はそれを見付けます。彼は、立方根とか五乗根の質問に全て答えますが、馬と同じ位に早いです。そして誰もそのことが分かりませんでしたので、彼は自分の小さな仕掛を説明しました。9までの素数を五乗すると、最後の数字は最初の素数と同じになります。更に、二桁の数の五乗も、何百万の数字であっても下一桁の数字を教えてください。よって九つの数字を置くとか書けば、人々はもうびっくりします。馬の見世物師は全てのことを決して言いませんでした。彼は騙そうとしているのです。そして学者たちは、彼に教えるべきことは何もありません。少なくとも馬について教えることは何もありません。恐らく、人間についてもありません。

(一九一三年三月二六日)

(1) 第十八章参照

(2) ルネ・カントン(一八六七～一九二五)は、フランスの生理学者・生物学者であり、海水と生物の成分類似を指摘した。

二十三 ナポレオンは許した... (NAPOLÉON PARDONNAIT...)

ナポレオン一世が最も印象深かったことの一つは、もしも『回想録』を信じるならば、気分や怒りや裏切りさえも容易に許していたことです。人間の感情は変わり易く、出来事次第であり、友情や忠誠心は任せて置けば物事を悪化させないで、全てが元に戻ると彼は考えていました。そこには力強い哲学があります。というのも反撃しない時、情熱は忽ち消え失せるからです。反対に、もしも憎悪には憎悪で応えていたなら、そこに人は新しい憎悪の理由を見出して、ドラマが始まります。それ故にいわば何でも心の中を全てを打ち明けるあからさまな言い訳は、殆ど何時も有害です。感情はそれらが順次表現されて生まれます。私は、男や女たちが俳優のように自分の台詞の言葉に感動しているのを良く見ました。反対は沈黙です。時間が全てを和らげます。それ故に私は、決して憎まないようにしようと思います。私は直ぐにもっと幸せになり、未来はもっともっと幸せです。

良き友は私に言いました、「そうです、パングロス。私はあなたが何時も楽観主義であるのを知っています。そのことはあなたを悲しませ、それを否定します。あなたが気に入っているのは信じることです。あなたはそのことを信じています。あなたは何でも信心深く、正確に言えばそれは宗教です。あなたは幻想を大きくします。私は真実を探します。それは屢々考えるには楽しいものではありませんが、他にやれることはありません」。

この話には罫があります。何故なら私は、楽観主義が宗教であって欲しいと望んでいるからです。そこには一種の義務さえ与えます。しかし、始めに私は理論と実践を注意深く見分けます。私は、空中に浮かんでいるようなもので理解しないで、理論によって理解します。事物を正確に測定するのであって、それ自体に如何なる嘘もありません。単純な例ですが、私はお金を正確に数えます。それをやらねばならない限りは続けます。百フランでも、当てもなく購入しそうになるまで計算を故意にめちやくちやにすることはありません。全て計算は十分正確にやらなければなりません。計算のやり方で精神を形づくるのはそこからです。必要性が教えてくれるのです。

しかし実践するには、つまり私が一度教えた方法を活用するのが問題の時、私は他の検算で別の着想を思いつかなければなりません。さもないと私は我を忘れて、成るように成って、事物がそれ自体でそれらの流儀に従って行われることに私は期待することになります。というのも、もしも私自身をこれかあれかを望むであろう機械と見做すならば、私はそれに乗ることになるでしょう。私はもう何も望みません。例えば落胆は私自身の出来事です。決して瞑想は許されておりません。私は瞑想に反対しなければなりません。何であろうと私は真実を全て軽視しません。というのも、もしも私が自己放棄したなら、自己放棄することが真実になるからです。しかし、もしも私が自己を取り戻したなら、それも真実になります。私の隣人についても同じです。もしも私が真実のために彼から憎まれれば、そしてもしも彼と同じ憎しみを私が示せば、全ての劇が真実になります。しかし、もしも私が彼の憎しみを否定し、決してそれに答えなかったなら、私が彼を弱らせるのも真実です。平和は真実になるでしょうし、幸福も同じです。要するに人が行

うことは真実になります。何故なら人はそれを行うからです。従って、真実かどうかを自問するのは否定したことになります。真実かもしれないことを行うではありません。そこから宗教の真実性と邂逅するのです。欲望に従って信じながら、つまり論理の中に信仰を混ぜながら、間違えてばかりいて、全ての期待と希望への権利というものを導くのであっても、何も行うことはありません。行動しながら期待する代わりに、瞑想しながら期待すること、そこに修道士の間違ひがあります。

(一九一三年四月一日)

二十四 有機的に統治すること (GOUVERNER ORGANIQUEMENT)

国民は統治することを学ばなければなりません。そして統治することとは、一方の弁護士ともう一方の弁護士の意見を聞いて、二つの党派の間で選択することではありません。統治することとは、各々の細部が全体と関係を持たなければならない計画を、有機的に発展させることです。例えば君主制擁護者とかナポレオン支持者のために兵役を三年間に戻すことは、社会生活、階級制度、財産の分配、文明化、文化、倫理、そして最後には人間の運命を決めるあらゆる概念と結びついている崩壊又は組織する一つの行為になります。以上は、事物を如何に手に入れるのかです。外国の脅威は〈思想〉が勝利する好機でしかありません。従ってその行為は、直ぐにこの解答を自分のものにして他に試そうと望みません。いや寧ろ、これからやらねばならないこととして他を試すことは出来ません。でも討議すること、反対者を揺さぶる適切な理由を幾つか探すことは、妨げません。しかし、それらの理由は他人のためのものであり、自分のためのものではありません。その思想は防衛体制を生み出します。他の状況においては税金制度とか褒賞制度、あるいは処罰制度を生み出します。それは躊躇しません。有機的にその思考を発展させます。あなたもそれに反駁することが出来ませんし、動揺させることも出来ません。奥深いその意見によれば、外部からやって来てヨーロッパを全て変化させる衝突への警報は、少なくとも結果として社会的思想全体を目覚めさせ、全ての関係や義務や権利を明らかにするに違いありません。この様にしてその組織の中で、もしも拳が握られて叩いたならば、全機能が変えられて、熱気そのものになります。同様にこの状態においては、〈本国〉の帝国主義体制は身を縮めて、自分自身を感じ、自分を守り、脅します。残り的人々は弁護します。

恐らく、共和主義者たちに欠けているのは、制度や調和の感情によって決めることではありません。最終的に奥深い決定を自分自身に受け入れて良く理解することが欠けているのです。共和制はあらゆることにおいて議論によって証明されるような何ものかではありません。それは確立されて維持される何ものかです。財政危機になれば、解決を見出すのも共和制の思想です。そしてその解決は、あらゆる思想によっても意味を持ちます。国家防衛にとっても同じです。防衛の問題も、他の全てのことに繋がっています。例えば、もしも国家防衛のために〈共和制〉を諦めなければならないのを証明したいなら、私たちは検証を拒みます。共和制は共和制の儘です。共和制本来の力と組織と本質に従って自らを守るのです。絶対に帝政の些細な部分を温存したり、再構成したりすることではありません。要するに、非常に緊急な危険を予想したならば、その危険は共和制にとっての好機です。自らを否定するとか疑うことではなくて、嘗てない程に強められるのです。従って、何か確かな防衛を見出すためには、愛のない信仰もない希望もない帝国主義者の見せびらかしを演じたいと思わないで、先ずは共和制の思想を良く保持しましょう。

(一九一三年四月十七日)

二十五 無意識の嘘 (MENSONGE INVOLONTAIRE)

非常に強靱なモラリストであるプラトンやストア派の哲学者たちは、間違いや嘘を言う間も同じ言葉を使っています。最初の時は何でも人は反対します。というのも諺で言えば、間違っても罪にならないからです。しかし、大変に若々しくて見てのと通りの田舎風で素朴な昔からの良識は、現代の緻密さに反して善良です。そして哲学の本来の意味、つまり最も見識があつて合理的な人間の言葉に従つて言うと、それは嘘と同様に間違いも嫌われるとプラトンは本の中で書いています。あるいは彼が言うようにわざと嘘をつくのと同様に、無意識で言う嘘も嫌われます。

この考えに従えば私は、わざとと言う嘘がそうでない嘘よりも多少なりとも悪いことを発見します。何故なら、例えば被告が嘘をついた時、私たちは悪だと信じるからです。裏切り者が嘘をついた時、私たちはそれを見抜き、私たちに教えている表情を疑うからです。あるいは何度でもそのことは見出されます。本質的に慎重な人間の裡や閉鎖的な人間の裡でさえ、そのことは大変良く認められます。私たちは決してそれが信頼出来ると思つてはいけません。しかし好意から方便でつく嘘に関しては、何時も殆どが善意の気持ちからの嘘です。恰も病人に顔色が良いとか、女性に全然老けていないと言うようなことです。

本当の悪は愚か者たちが齎します。彼らは先ず自分自身に嘘をつきます。従つて如何なる調査も行わず、本当に中傷を信じて、繰り返し行う時は特に恐るべきものになります。そして私は、中傷家たちをはっきりと自覚して、時には理解しました。憎悪の最初の効果は、悪口を言うと全てが本当に受け取られることです。そして決して怪しまれることがないのは、愚か者による嘘であるからです。それは彼が言うのと信じられます。彼がそれを言うからです。あるいは彼がその話を聞いているからです。あるいは彼の友人たちがそれを言っているからです。愚か者たちの礼儀は、他人事のように言うことなのです。そして私は、プラトンを読んで良く言うのですが、嘘つきたちと知り合いになつて恐ろしいのは、敢えて言うなら彼らの素直さです。彼らは全てを信じます。同じ嘘でも子供たちは良く気付きますし、余りびっくりしません。何故なら子供たちは未だ気楽で弱い精神を持っているからです。夢みたいなことを話すからです。しかし、そんな人間が生まれた国で、こんなお喋りで知り合いになるのは哀れです。

そこで私は言うのですが、本当の素直さは、それ自体の素直さを私は言うのですが、理性や生まれ付きの細心さを守るのは非常に困難です。例えば兵役三年制の法律の趣旨についてお互いの国に偏見はありません。彼らが先ず抱いて余りに愛した考えを、少なくとも強くするのを目指して合理性や行為を探るのは、屢々理解されません。かくして情熱という感情の動きが、反対の情熱を生じさせます。恐らく本能からの選択を追う自由な人間よりも立派です。そのことは解けない問題に代わるものです。「フランスは如何にして最良の防衛をするのか」。この質問をもっと分かり易く言うと、「二年間の兵役制を守りながら、如何にしてフランスを最良に防衛するのか」ということです。

(一九一三年四月十八日)

二十五 無意識の嘘 (MENSONGE INVOLONTAIRE)

情熱は歩きます。ドイツ国内の或る事件を仮定しましょう。反ドイツのデモがあったナンシーの事件に応じるようなものとしましょう。それが大きくなって、そこでは我が国とは違うものになって行ったと仮定しましょう。そこには興奮があります。それが戦争の本当の原因です。唯一の原因です。高齢の国民たちは、人間の嵐のように突然に駆け回るこの熱気に驚いていました。それはより賢明でさえあった思想と意志を変えます。それは最早、肉体をリードする思想ではありません。反対に、それは馬のように逆上して駆け出す肉体です。走る前に先ず全身を震わせて、あらゆる種類の狂ったイマージュに真実と生活と力を与えるものです。その時は全てを信じます。何故なら肉体の興奮は、熱病で錯乱したように全てを強烈に照らすからです。従って老人たちは、眼に見えない不和の女神が自分の翼に触れさせて、まるで空からやって来た怒りそのものであり物理的な行動である、と真に受けて言っていました。結局そのことは情熱のメカニズムを、そんなにも酷く描いてはいません。今日では、私たちは別な風の間違えています。何故なら原因にとっては結果しかないものとして、最も突然に襲う情熱を正しい理性と見做しているからです。私は憎みます。何故なら私の中に怒りがあるからです。しかし私は、憎むから怒りがあるのだと何時も信じています。真実とは、情熱が私たちの考えや神から齎されるものでないばかりか、単に自然発生的な肉体の動きです。屢々病気によるものであったり、それ自体で大きくなる強力な活動によるものであったりもします。もしもそれが伝染されるもので大衆の中に達したなら、それは既に戦争です。

ギリシア神話のオイレウスの息子アイアスはトロイア戦争の英雄ですが、『イリアス』の中で彼は感じ良く書かれています。ホメロスは、預言者カルカスの姿を通して海の神ネプチューンが二人のアイアスに激励しに来て、超自然的な勇気を彼らに与えていることを語っています。その点についてはアイアスの一人がもう一人のアイアスに言っています、「アイアスよ、私たちに話をしに来たのはカルカスではない。私が神の足音と足跡を認めたのは神が去って行った時だ。そして、そこでは胸の中で心臓が繰り返しどきどきしている。そこでの私の両手両足は、空ろになって戦いへ行くのだ」。アイアスは賢人の如く書かれています。しかし彼は同意しても、その同意がその結果彼の両手両足の激しい情熱と寛大な心を同じ様に齎すという考えはありません。国民は一人の人間のようなのです。国民は情熱を感じますし、その情熱を判別したいと思います。しかし、その情熱は戯言を言います。

それ故に、その場合は原因を正確に認識して、動きの変化と理性に対して決心しなければなりません。情熱が歩き出すや否や、きっぱりと歩きを止めなければなりません。考えないのではありません。というのも罣がそこにあるからです。肉体は動かしません。あるいは別な側面を考えます。それが本当の尊厳になります。決して議論することではありません。色々な考えの動きをきっぱりと止めることです。情熱という感情の動きを直ちに止めることです。或る日私は、大声で論争して興奮していた群衆の中に、友人と一緒にいたのを思い出します。私たちは冷静になろうと話しました。しかし、彼は両手を少し動かすすぎにいました。まるでアイアスのようです。

。私は彼に言いました、「両手はポケットに」。彼は私の言うことに従いました。すると私たちは、決して口論することはありませんでした。

(一九一三年四月十九日)

二十七 宿命 (LA FATALITÉ)

運命とか宿命という観念は、知性だけで支えることが出来ません。何故ならそれは調和しない二つの条件を含んでいるからです。出来事とは、一連の原因から免れられずに起きると仮定されます。しかし、その出来事が関係していること全体は隠されているとも仮定されます。それは何か最大の悪意があると仮定するものです。というのも一続きの原因によるものであるなら、準備が可能になるからです。そして予想することが出来れば、殆ど全ての大事故は防げます。例えば自動車の運転手が少なくとも事故の観念を持てれば、世界中の事故を最も容易に防いだことでしょう。従って、もしも未来が前もって決められているとしても、未来の予想は絶対に不可能に違いありません。私が言いたいのは、心配したり注意深くなったりした人間の精神に結合したものは全てが現実の未来に関係する唯一のものを示す必要はないということです。そうでなくても未来は変わって行きます。従って、セヌ川へ自動車が落下してあっという間にこの女性(1)と二人の子供が非業の死を遂げるだろうと言う人々は、自分の仕事に注意深い運転手であっても、近い未来が彼の精神に分かることは全く不可能な状態であるように、無分別になったと仮定しなければなりません。そうは言っても、あらゆる状況を考えるようにしなければならないのです。ところが未来は前もって決まっているので、庶民の考えは或る場合に注意力のお陰で自然に未来を知ることが出来るという考えになります。従ってそれを変えることは、未来が前もって決められていると認識するための基礎を否定することになります。

〈占い〉という昔からの観念は、全く単純で自然であったと私は信じます。人間の行動の或る状態の印から予想することが重要だったのです。それは危険を避ける方法だったのです。その意味において今では、強風が吹く前に小さな漁船は港へ戻れるように、信号所が嵐を教えてくれます。未来は修正出来ると考えるのは自然です。それだけより良く予測出来るのが分かります。

反対の考えに関して言うなら、未来は変えられません。それは活発になった感情によって照らし出された思い出によるものです。酷く打ちのめされた人間という存在が考えることによって不幸な事件の推移に戻る時、彼が見出すのは知識の豊富さと同時に全くの無力さです。彼は道を変え、災難に気付きます。彼はそれを認めますが、同時にその存在があったのでこれからもあることを良く知っています。それは決められていた事柄です。何故ならそれは過去のことであったからですが、彼には未来のこととして再び見えるからです。この思考は我慢がならないことですが、感情が何時もそこへ彼を連れ戻すのです。彼は自ら絶望を求めます。過去への旅に出るこの哀れな巡礼者を生む度に、最も耐え難い姿の彼を見出します。何故なら彼は、その姿を見出すのを知っているからです。その時は全てが印です。全てが前兆です。しかし、この印と前兆は必要ありません。何故なら彼の不幸も過去のものであるからです。この旅に行くのは最早人間ではありません。彼は思考する事物です。行為のない観念です。成果のない意志です。正確に言うなら、そこにいるのは悲劇作家です。その様にして偉大な劇作家は、それを描写するのを覚えました。そこから悪意の神という昔からの観念も生まれました。そして、この過ぎた過去の未来という概念は、殆ど全ての教訓に死が襲ったのです。

(一九一三年四月二五日)

(1) この女性とは、米国の舞踊家イザドラ・ダンカン(一八七七～一九二七)のことである。この事故の死傷者は、ダンカンと二人の子供と乳母であった。

二十八 年齢 (L'ÂGE)

五十歳位の男が私に言いました、「俺は歳を取ったなあ、と感じるよ。もう気持ちに張りがないのだ。もう閃きが湧かず、元気だった頃のように発想が湧き出てこないのだ。だからもし俺が少しばかり反動的になっていても、びっくりしないでくれ。俺は諦めているし、そうなるしかないのだ。しかし、それは楽しいことではないよ」。

ゲーテは「白髪のをした急進者は、狂気の絶頂である」と言いましたが、私はこの言葉から僅かな後悔が良く見えます。それは何時も急進的精神を持った人間のものですが、その本質は宮廷人的です。そして、その老人の傾向は既成の秩序を崇め、あらゆる権力に敬意を払って行くことであるのは本当です。しかし、それはあらゆる世代の性癖です。人民の友は何時も損をして間違っって判断されます。人民は極めて多忙で、ばらばらです。もしも判断する人々の言うことしか聞かなかつたならば、もしも有権者の投票用紙が忘れられたならば、フランスは軍隊による専制政治や宗教的独裁を甘受することになります。従つて、肉体は肉体の法則によつて歳を取る間に、精神は肉体よりも早く多くが老化します。せめてアカデミーや行政の判断という悪い空気を呼吸するのに同意しても、文字通りそれは毒になります。その様にして精神が老化して行く時、年齢による打撃はより生き生きと実感がこもつたものになります。自由に思考することが老化の喜びです。

その中には情熱としての老化があります。もしもあなたがそれを受け入れたなら、あなたはまるで拒むことが出来なかつたように全てが過ぎて行きます。もし私が敢えて言うなら、肉体による証明は直ぐに精神による証明になります。何故なら観念は、決して自分の場所に戻れる立像たちと同じではないからです。それらを絶えず作り直さなければなりません。そのことを思考しなければなりません。それらを愛さなければなりませんし、望まなければなりません。それ故に、もし私が精神の老化を一度甘受したなら、次には体を屈めて挨拶して、歳相応の誠意ある言葉を言います。そして身に受けたこの悲しみが今後を証明するものであり、永遠を証明するものです。後戻りする考え方が歳のせいであるのを否定しないなら、これらの考えは年齢の苦味を多くつけ加えていると私は言います。私はこの惨めな英知を信仰心の中に持っています。それは青春という希望が決して白髪と一緒にには行かないと信じられております。何故なら自然は何らかの犠牲を要求するからです。それは急いで全てを抛擲させます。情熱は今でも絶望を、何時もあらゆる悪に結びつけようとしています。その様にして二十歳の絶望者を理解させるように、老若男女は早く歳を取つて行き、自分の意志で人生を見捨てます。

私は多くの人々の裡に、この内的統治の危機を観察します。それは人間の無能さと、代議士たちの腐敗や無知に対して悪口を言う演説が行われると解ることです。理性や意志や希望を取り戻すことは、秋の日のように灰色をしていて味気ないものです。それらは愛のない和解です。もしも正義や平等や、圧制に対する抵抗に応じる公的生活が、まさしく年齢による惨めさに効く唯一の薬であることを理解しないなら、その断絶は遠いものでなくなります。幸福な者は、それを見抜くのが遅すぎる時や知らねばならない時よりも前に、そのことを見抜いていました。

(一九一三年四月三十日)

二十九 不正義と好戦的精神 (L'INJUSTICE ET L'ESPRIT GUERRIER)

もしも軍備や戦争を押し進めるのは冷酷な悪戯っ子たちであるのが本当であったなら、幸いなことに平和が個人個人にもあるように、国民から国民へ直ぐに平和が保証されることでしょう。というのも犯罪が起こるのは稀であるからです。しかも隠蔽されているものでもあるからです。しかし戦争好きな精神を持った人には、個人的な興味や関心を忘却させるものがあります。それは酔心させる詩のようなもので、意地悪な人たちの中には決してないものです。要するに、もしも戦争がお金持ちになる可能性が最も少ない危険を負っていて、お金持ちになる最も辛い方法の一つでしかなかったなら、戦争は他人の人生を全く重んじなくなるでしょう。そして開戦論者は少数派でしかないでしょう。多くの人々は絶対的に平和を望み、同様に絶対的に権利には賛成し、犯罪には反対する意見を主張します。

しかし、現実とは違います。全然そうではありません。友人の心の中にある戦争は、彼自身が平和に反抗するのが最良であり、武器に走ります。私は、好戦的な人々自身の心の中が、余りに不満で悲しい感情であるのを何時も見て来ました。それは平和の状況が或る種の恥辱でもありました。何故なら彼らはそれに腹を立てていたからです。不正義への慣れと好戦的精神には一つの関係があります。そうなのです。しかし、絶対的ではありません。好戦的精神は、怠け癖とは極めて似ても似つかないものです。平凡な快楽、虚栄心、軽蔑、隠された冷酷さとも違います。反対に心を清め、君主の美德による嵐のような激情で、それらの全てから免れさせます。ここにいるのはお金持ちで、高級な服を着ていて、美味しい物を食べて、申し分なく礼儀正しくて、侮蔑的でもある一人の子供です。詩には関心がなく、正義にも好意を持たず、中身の無い教育に自分自身をがんじがらめにしているのは、慎重で用心深い精神です。彼自身の心の底では、寛大で高貴な犠牲的精神に対して異を唱えて躊躇しております。礼儀や挨拶で身を固めて、鎧で息苦しくなっています。二十歳になったその両眼は、監獄の窓のようなもので、見るに哀れなものです。好戦的な彼らは退屈しています。その退屈が戦争の原因なのです。

戦争を好む精神は、先ず表面上の不平等が彼らを喜ばせます。それは彼らの偏見と特権が、大変多く与えられている〈権力〉という教義によるものです。しかし彼らの心の中の秘密は、信じられない位に多くの良いものを明らかにしています。それは冷たい偏見ではありません。憎しみは口実でしかなく、自由を奪われた美德を解放する機会でしかありません。彼らの同胞への愛がそれらを捕らえて、そして取り除きます。突然のその活動によって彼らは我を忘れます。ホメロスの叙事詩『イリアス』に欠伸をしていた彼らは、それらを外部から手に入れます。皮膚からです。原始からの詩は、それらを取り去ってくれます。彼らはその同胞愛を決して疑いませんでした。彼らは知識がなくても愛します。以上のように僅かな情熱と慎重さが、彼らを解放させています。実際に熱狂という力によって彼らには、自分の人生を与える力が出来ております。彼らが本性を偽っていないならば、彼らは出し惜しみします。でも彼らは全てを与えます。悲しいかな、平和が彼らに要求するのはもっと少ないのです。そして内部の力は不足します。彼らには外部からの刺激がなければなりません。憎しみと怒りの口実です。プロレタリアや夢想家たちの

家では対立でさえも既に刺激になりますが、彼らは熱狂しながらも寛大です。国民に特権を譲ることはありません。彼らは〈党派〉のために死にます。彼らは〈同胞愛〉を楽しみます。彼らは使徒であり、理想主義者であり、根っからの社会主義者です。美德の大饗宴のようなものです。彼らが監獄へ持って行くのは、思い出と希望です。従って彼らは〈祖国〉に忠誠を誓い、その上〈人間性〉を拒みません。そして正義は二倍強くなります。

(一九一三年五月二日)

三十 ジャンヌ・ダルク (JEANNE D'ARC)

ジャンヌ・ダルク (1) の歴史は恐らく今では、ヘラクレスの伝説よりも美しいものです。というのもヘラクレスには力があつたからです。ジャンヌには信仰しかありませんでした。この英雄の冒険は全てが完璧です。イエズス会士や貴族や王を求める宮廷人たちは、自分の情熱と希望を温めるために、その美しい崇拜精神に身を捧げます。しかし、それは無駄です。少しでもその女傑のことを考えると、彼らはイエズス会士でも宮廷人でも悪人でもなくなって仕舞います。何故ならそれらの観念は、理解したいか否かしか問題にしないからです。ところが美しい詩は、人が望まなくても癒してくれます。音楽が、とっつきにくいサウル王 (2) の心を和らげるようなものです。

そこにある主題は、宗教に対する信仰です。そうです、一方では形式や礼儀が全てです。官僚主義と書類の山が全てです。全てに慎重で些細なことにも拘ります。全てが仲介者で、おべっか使いで、あくどい便乗者たちです。全てが妥協であり、協定であり、奸計です。計画と会議が全てです。アカデミー会員が全てであり、教会参事会員が全てです。快樂と恩寵と笑いが全てです。全てはこの世の〈劇場〉です。結局、エリートなのです。というのもエリートと呼ばれなければならないからです。

正面から全ての国民は靈感を受けます。正義が主張されます。大空や大地からの神の声によって、直接天啓を受けます。本当の奇跡は精神と実行のものです。愛は戦っています。〈平和〉は〈戦争〉を粉碎します。でも憎しみという稲妻はありません。ここでは情熱による策略が私たちの隙を窺っています。悪人に成らずに勇敢に成るのは何と難しいことでしょう。武装された〈平和〉が戦争になったことは何回あつたことでしょう。彼らはそのことを良く知っています。貴族たちは皆が意地悪にもものを見ます。最も高尚な義務は私たちが不公平を崇めるようになることであるのを、彼らは心の中で願っています。愛は憎しみの中で自ら変わります。拘束の中に規律があります。激しい怒りの中に勇気があります。しかし、英雄の意志は決して目的から逸れることがありません。ジャンヌは戦いました。ジャンヌは怪我をしました。しかし、彼女は決して武器で突きませんでした。戦争を受け入れるのと同時に、その美德は戦争を拒みます。ソクラテスとマルクス・アウレリウスの最も深淵な英知が、この気高い娘の行動の中に完全に定義され、極限状態となり、言葉となって見出せます。戦争の最中の死骸や流血を乗り越えた英雄たちの最も純粋な全ての精神は、再び純粋な〈権利〉という思想を主張しなければなりません。「あなたは決して殺さない」。その精神は戦闘を超えています。幾つもの力の中の一つの力のようです。

知ることもやらなければなりません。司教たちの復帰によって、ジャンヌの美しい歴史も階級制度と教義という失望の中で終わりを告げます。〈革命〉が〈帝政〉の中で終わりを告げたのと同じ力によるものです。私欲が、彼らの回り道であり罫です。エリートは、言い負かすことを覚えないうで、管理することを覚えます。〈帝政〉の後はブルボン家です。神聖同盟 (3)、幾つかの協定、国民に対する王たちの同盟があります。〈信仰〉に対する盲信です。ジャンヌの焚刑はあらゆる物事を明らかにしています。敬虔なあなた方は戦います。司教や宮廷人や、それが復讐

であった精神的に狐のように狡い男たちのために、あなた方は戦います。彼らは焚刑の火の周りで踊ります。如何なるアカデミー会員の推論的思考も、この輝かしい光景を変えることはありません。あらゆる人間的な見方をするなら、この拭い難い悲劇から、はっきりしていることが示されています。それは労働の神聖さです。国民が持つ先見の明です。そして大人たちの裏切りです。それが右派の栄光です。戦争のための戦争なのです。

(一九一三年五月四日)

(1) ジャンヌ・ダルク (一四一二～三一) は、百年戦争でオルレアンを英国軍を破り、フランスを危機から救った愛国者。その後、異端の罪に問われてルアンで焚刑に処されたが、オルレアンの乙女とも言われている。

(2) 旧約聖書 (サムエル記上11) によると、サウルはイスラエル王国の初代の王になる。

(3) 神聖同盟は、一八一五年九月にロシアの皇帝アレクサンドル一世が提唱して、オーストリア皇帝、プロシア国王と締結した同盟である。抽象的・精神的なもので具体的に拘束する内容はないが、ヨーロッパをフランス革命以前の旧体制に復帰させる意図があった。

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポV

【2014年7月号】

<http://p.booklog.jp/book/81407>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/81407>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/81407>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ